
765+ α の挑戦

うさぺん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

765+αの挑戦

【Nコード】

N4365P

【作者名】

うさぺん

【あらすじ】

今までなかなかいいプロデューサーに出会えなかった765プロのアイドル達。そんな状況を打開すべく、高木社長は社運を賭けた765プロの番組をケーブルテレビで放送することに。そして街中でたまたまぶつかった安井と大平を新たなプロデューサーとして迎える。そして「安井のやりたいようにやらせる」ということでプロデュースはスタートする。その日々を書いた小説です。オリキャラと765プロメインで進行します。876やその他の人々も登場します。

導入編「キャラ紹介」

やすいもちかず
安井持和

24歳。クールで回りに流されない性格。頭脳はIQ280とも320とも言われている。

地元ではかなり有名な天才だが、その頭脳や能力を周りに自慢することはしない。

いわゆる「世間を斜めから見ている」タイプ。毒舌で人の苦しみは何よりも好き。だがそれはその苦しみを糧にその人が成長することを見越しての行動である。

なにげに運動もできる。天は二物を与えた。

伊達眼鏡で、ファッションにこだわりはない。

街中で最近の芸能界について熱く語っている所を高木社長に見初められ、プロデューサーにいやいやなる。

趣味は人へのあだ名付け。しかしそのあだ名は漆黒の如し。

あと野球観戦とサバイバルゲーム。テレビCMが大嫌い。時間とかではなくCM自体が嫌。

上下関係なんてクソくらえ。高木社長だって武田さんだって呼び捨て。

でも人前ではさん付けする。実は優しい。

おおひらはじめ
大平一

24歳。明るくて活発な性格。スポーツ万能。

いわゆる脳筋というやつで、直感で動く。安井曰く、「チンパンジーのほうがお前より頭使ってるぞ」

かつては町中の中学校を仕切る番長だった。安井とはそのときに殴りあったのがきっかけで以来無二の親友となった。いわゆる男の友情。

高校時代は安井とともに二大番長として恐れられた。一方で野球部

として甲子園に出場している。

高校卒業も危ぶまれるほどの成績だったが何とか卒業。スポーツ推薦で大学に入ったらたまたま安井と同じ大学だった。

意外と新聞やニュースは見るので芸能には詳しい。と言うか芸能しか入ってこない。

安井の芸能論の矛盾などを語っている所を同じく高木社長に見初められた。プロデューサーには二つ返事になった。

趣味は野球（見るのもやるのも）。草野球チームの4番。肉が好き。嫌いなものは警察とグリーンピース。

安井の発言で傷ついた相手をやさしく労わる。

舞台

東京によく似た都市。人口も東京と同じくらい。

一流大学や一流高校もある。

東京と違うのは知事や警察が二次元を規制しようとしてないところ。

（オイ

第一話「出会い、そして初日」

街中を一人の男が歩いていた。

彼の名前は高木順一郎。

765プロダクションという芸能事務所の社長だ。

事務所にはすでに多くのアイドルがいる。ただ、これまで彼の期待するようなプロデューサーはなかなか現れず、辞退されたりプロデューサーになっても個性的なアイドルに振り回されて途中で辞めたりとなかなか順風満帆とは行かなかった。

それでもアイドルたちは血のにじむような努力でちらほら番組に出るまでになった。

だが、いつもいる場所は隅。いわば数合わせとしての出演ばかりだった。

話が振られたりすることも少なく、知名度も上がらなかった。

自分たちの力だけでは限界が来ている。

高木はそう考えた。

そこで地元のケーブルテレビに依頼して、765プロの番組を作ってもらうことにした。

そして街中でティーン！と来る人物・・・つまりプロデューサー候補、または番組の司会を探しているのだが、いつもいつもそれは徒労に終わった。

アイドルの知名度がいまいちなら高木のことを知る人は皆無に近く声をかけても変な目で見られたりそそくさと逃げられたりした。

今日も高木は街中でプロデューサー候補を探していた。だが結果は同じだった。

それどころか今日は声をかけたら変な人に勘違いされたのか走って逃げられるわ、女性に声をかけたらナンパと勘違いされてその彼氏に殴られそうになるなど散々だった。

高木「ふう……。今日もうちのアイドルを支えてくれるような人はいなかったな。しかも今日はいつもよりひどかった。もう、彼女たちに任せるしかないのだろうか。秋月君は自分がプロデューサーになると言っているが、そうなると秋月君は芸能界から離れなければならぬ。それだけはどうしても……」

ドン！

？「いてーな、おっさん。どこ見て歩いてんだよ」

高木「ああ、すまない」

？「まったく……」

しかし、その不良っぽい青年と友人らしき青年の会話を聞いて高木は驚いた。

不良っぽい青年「……。それで続きだけど、今のアイドルはみんな温室育ちなんだよ。あんなだからいざ人気が無くなると消えちゃうんだ。松田聖子とか、中森明菜とか、昔のアイドルみたいなやつは今の芸能界にはいないんだ。アイドルは、外に出して、汚れて痛めつけられて成長していくのが一番なんだよ」

友人っぽい青年「でも、お前がいった松田聖子とか中森明菜も温室育ちじゃないのか？どっかの事務所にいたらみんな温室育ちじゃないのか？」

不良っぽい青年「かーっ！だからお前は脳筋なんだよ。俺が言いたいのアイドルだからって歌とか踊りとかドラマとかだけに出てちゃ駄目だってことだよ。アイドルでも、もっと汚れるやつとか、体使うやつとか、イメージ崩壊しそうなやつとか嫌がらないでやって

いかなないと人気が無くなってからひどいことになるんだよ。そもそも最近はアイドルについてるプロデューサーがあの仕事はダメ、この仕事はダメって選別するのが問題なんだよ。俺がプロデューサーだったら泥に突っ込む仕事だって、パンストかぶる仕事だって喜んで引き受けるぜ？」

友人っぽい青年「お前は正論を言ってるのに、何でいつも行き過ぎるんだよ・・・」

高木「・・・あの青年、確かにたといえは極端だが考えは的を射ている。そしてなによりも最近のプロデューサーが忘れているアイドルへの厳しさを持ち合わせている。もう一人もおつむは弱そうだが芸能についてはなかなか深い関心をもっているようだ・・・」

高木「ティンと来た!!」

高木「おおい君たち、ちょっと待ってくれ！」

不良っぽい青年「ん？さっきのおっさんじゃん。なんかお詫びにおごってくれんのか？」

高木「ああ、おごってやろう。だがもうひとつ重要な用件があってね・・・」

近くのカフェで二人にコーヒーと軽食をおごり高木は用件を話した。不良っぽい青年は拒否したが、高木の再三の説得に折れて、『氣が向いたら』やってくれることになった。

もう一人の青年は、テレビに出たかったのかあっさりと了承した。ひとまず明日、やってくれるのなら765プロの事務所へ来るように言って高木は青年たちと別れた。

翌日。

この日、事務所にはアイドルが集まっていた。

仕事のほかの俳優の都合でキャンセルになったのだ。

「まったく最低ね！私が有名になったら問い詰めてやるわ！」

そう言って憤りを隠さないのは水瀬伊織。

「いつになったらそこにたどり着けるんだろうね？」

そう言ったのは天海春香。

「そういえばなんか社長が機嫌よかったじゃない？ついに捜し求めていた人物に会えたとか・・・」

そう言ったのは如月千早。

この三人が番組に出る予定だった。

春香「でも社長さん、ほんとに機嫌よかったなあ・・・。私たちのお弁当まで買ってくるなんて言ってたけど・・・」

伊織「ある意味、社長をパシリにしているのと同じよね」

その765プロの事務所のビルの前に一人の青年が立っていた。

？「ここがあの高木っておっさんの事務所か。きったねえビルの中にあるんだな。腐っても芸能プロダクションなんだからもっと綺麗なビルにあると思っていたが」

上下迷彩にエアガンを背負った青年は事務所のある3階へと上がっていった。

春香「そう言えば、もうすぐその新しいプロデューサーさんが来るんじゃないかった？かっこいい人だいいな。」

伊織「かっこよくても前みたいにならないうちに3か月で辞めるようなのはごめんですよ？」

千早「社長は芯のありそうな青年二人って言ってたけど……。気が向いたら来るって言うのは心配ね」

バン！

春・伊・千「!？」

？「何だこの事務所。外面も汚けりや中も汚ねえな」

春香「あ、あわわ……」

千早「銃を持って……何も言わずに入ってきた……」

伊織「と言うことは……」

三人「ドロボー!!」

？「あ？俺は泥棒じゃねえよ。おい、そのリボン、社長はどこだ？」

春香「社長さんと会ってどうするつもりですか!？」

？「何だよ、完全に泥棒扱いかよ。大体俺が泥棒だったらお前らを脅してるだろ？」

千早「社長でしたら今出ていますけど」

？「何だよ、あのおっさんが来てほしいって必死に頼むから来てやったのに……。まあいいか、どうせやることもねえし、ちょっと待つか。おい、そのデコ、コーヒーかなんかねえか？」

伊織「……!! あんたねえ、初対面の相手に言うことじゃないでしょ!？ 大体デコってなによ!？」

？「あだ名だよ。どうせそう呼ばれてるだろ？」

伊織「なあんですってえ!？」

高木「やあ、すまない。ちょうどお昼時でね、レジが混んでいたんだ」

春香「あ、社長さん!なんか変な人が!」

高木「ん・・・？ おお、安井君！来てくれたのか！正直あの雰囲気から来ないんじゃないかと思っていたが・・・」

？「いや、なんか面白そうだったんで。それにちょうど近くを通りかかったんで」

千早「あの、社長、もしかしてこの人が・・・」

高木「ああ、そうだよ。ちょっと自己紹介してもらえるかね」

？「・・・安井持和だ。なんか知らないが、このおっさんに頼まれてプロデューサーになることになった。よろしく」

春香「・・・言うことはこの人が私たちの救世主なんですわ！」

伊織「ちよっと待ってよ！こいつにプロデュースされなくちゃならないわけ？冗談じゃないわ！私、ほかのプロダクションに行く！」

安井「まあ、落ち着けやデコ八」

伊織「誰がデコ八よ！！！！」

安井「行きたいって言うなら止めはしねえ。ただし、このプロダクションのやつ全員にそう言ってから行け」

伊織「え？ちよ、ちよっと待ってよ。私は冗談のつもりで・・・」

安井「あ？冗談だあ？」

スッ・・・

ダダダダダ！

春香「ひゃあああああああ！？」

千早「・・・！！！！」

伊織「きゃあああああああ！？」

安井「そんなこと冗談でも言うんじゃねえよ」

高木「おいおい安井君、事務所の中でエアガンを乱射しないでくれ。それになんかエアガンの域を超えていないか？」

安井「ちよっと改造して威力が上がってるだけですよ」

春香「さらりととんでもないこと言った！！エアガンの改造って犯罪ですよね！？」

伊織「あ・・・うあ・・・」

安井「それが冗談でもそれを聞いて、心の片隅に小さい傷を負うやつもいる。その傷はいずれ大きくなってそいつを苦しめる。いいか、二度と言うんじゃないぞ」

伊織「グスッ・・・は・・・はい・・・」

高木「・・・えーと、ところで安井君、大平君は？」

安井「あいつですか。あいつだったら家で熟睡してると思いますよ」

高木「安井君も来たし、呼んでみてはどうかね？」

安井「そうですね、そうします」

ピポパ・・・プルルル・・・

伊織「ひぐっ、ぐすっ、怖かった・・・」

春香「あの人、確かに芯がありそうだね・・・」

千早「芯は、すぐく曲がりくねってそうだけど・・・」

数十分後・・・

ドタドタドタ・・・

ガチャッ！

？「おい、何してくれてんだよ！行くときは電話しろって言っただろ！」

安井「俺はサバゲの帰りに立ち寄っただけだから」

？「うそつけよ！今日は試合も練習も無かっただろ！意外と乗り気だったから来ただけだろ！それで俺にばれるといじられるから黙って言っただけだろ！」

安井「ば、ばかやろ、別にそんなんじゃないよ・・・！」

？「お前は動揺がすぐに出るんだよ！普段のポーカーフェイスはどこ行った!？」

安井「黙れこの野郎！撃つぞ!？」

？「撃てよ！本当のことだろ!？」

高木「まあまあ、落ち着きたまえ。大平君も自己紹介をしてほしい

のだが」

？「あ、はい。えーと、大平一って言います。好きなものは野球と肉、嫌いなものは警察とグリーンピースです！」

安井「プッ」

大平「何笑ってんだよ!？」

安井「お前が敬語とかwww何年ぶりだよwww」

大平「そんなに昔じゃねーよ!結構使ってるよ!」

安井「万引きして警察に捕まったときだろ？」

大平「してねーよ!!」

春香「あ、あの安井さんに大平さんですね!？質問があるんですが!」

安井「ん?いいぜ、何でも聞け。プライベートなこと以外は答えてやる」

春香「あ、あの安井さんと大平さんはどこで社長さんと知り合ったんですか？」

安井「えーっとだな。街中で俺がこの脳筋と歩いてたら・・・」

大平「誰が脳筋だよ!!」

安井「そしたら、高木のおっさんが俺たちにぶつかったんだよ。で、少しして急に呼ばれて、喫茶店でスカウトされてこうなった」

春香「ということは社長さんがティン!と来た人なんですネ!」

高木「ああ、そうだ。いったいいつからこれを待ち望んだことやら・・・」

安井「泣くなよ、おっさん。湿っぽいのは苦手だぜ」

千早「あの、ところで・・・」

安井「ん？」

千早「さっきから社長のことをおっさんって・・・。一応年上だし上司だからさん付けしたほうが・・・」

高木「いいんだよ、如月君。彼がプロデューサーになってくれると言ったとき、彼はひとつ条件を出してきた。それは上下関係を見捨てること。私はそれを承諾した。だから問題は無い」

安井「えーと……。高木、さん」

高木「え……。？さん付けしてくれるのか？」

安井「自分のプロデューサーするやつがああ言ってるんで。さすがに人前ではさん付けしますよ」

大平「お前の敬語こそ何年ぶりだよ……。」

安井「4年ぶりかな」

伊織「4年も敬語使ってなかったの！？」

安井「おお、デコお帰り。そうだな、大学教授も慣れたら呼び捨てだったな」

伊織「だから、デコって……。」

大平「まあまあ」

高木「そうそう、プロデューサーは安井君一人の予定だったが……。さすがに一人ではつらからう。大平君もプロデューサーとしてやってくれるかな？」

大平「え！？でも俺、プロデューサーなんて……。」

高木「大丈夫だ。これまでのプロデューサーも皆何も分からなかった。それに安井君だってそうだろう？」

安井「はい、何も分かりませーん」

高木「アイドルと触れ合って勉強していけばいいさ。さて、やってくれるかね？」

大平「……。はい！こんな俺でいいのなら、やらせていただきます！」

安井「ブッ」

大平「だから俺の敬語で吹くな！」

安井「あ、社長。俺のデスクは？」

高木「そうだな……。おい音無君、空きデスクってどこだったかね？」

小鳥「私の隣と向かいですよ」

安井「おっ、いい感じの姉ちゃん発見」

大平「ナンパすんなよ？絶対にすんなよ？」

安井「俺はそんなんじゃないから。バリバリ草食系だから」

春香「草・・・食・・・系・・・？」

千早「草食系の定義ってどんなだったかしら・・・」

伊織「頭が痛いわ・・・」

安井「じゃあ俺隣な」

大平「お前確実に狙ってるだろ？」

安井「馬鹿、脳筋肉食系のお前がナンパすのを防ぐためだよ」

大平「しねーよ！っていうか脳筋肉食系ってどんなジャンルだよ！」

安井「よっしゃ、お近づきの印だ。みんなで飯行こうぜ？」

春香「えっ、いきなりいいんですか!？」

安井「ああ、問題ない。いい焼肉店知ってるんだ。がんがん食っちゃまえよ」

千早「いきなりそんなことを・・・。なんだか申し訳ないです」

安井「気にするな。おっさんも音無さんも行くだろ？」

大平「お前www小鳥さんだけ苗字でさん付けってやっぱり狙ってるだろ！」

安井「そ、そんなんじゃないよ・・・！」

大平「だからポーカーフェイスはどこ行ったんだよ!？」

これは765プロの新たなステージの第一歩となる。と言うかなってもらわないと困る。
とりあえず、小鳥さんにとってもらった2ショット写真を額に入れて、今日は寝ることにする。

（2010年1月某日、安井の日記より）

第二話「心の中の深い悩み」

律子「今日は全員集合なのね」

あずさ「何でもプロデューサーさんが決まったらしいのよ」

律子「本当？嘘じゃないのね？もつとも信用はできないけど・・・」

響「そりゃ何回も騙されたらなあ。今回のプロデューサーで何人目だっけ？」

律子「えーと・・・。12人目、いや、13人目かしら？」

貴音「12人目で合っていますよ。ただし、二人いらっしやるので12, 13人目ですね」

真「それはそうとして、いつになったら来るのさ？」

美希「あふう・・・。朝早くたたき起こされておまけにプロデューサーが遅刻なんてひどすぎるの」

律子「あんたは寝すぎ。今日がちょうどいい睡眠時間よ」

高木「確か、もうすぐ来るはずなんだが・・・」

バン！

安井「社長、待たせたな！大平がネクタイが無いとか言いやがって探してたぜ！」

大平「お前なんてまた上下迷彩のエアガン保持じゃねえか。スーツ着てこいよ」

安井「スーツなんて成人式でも着てねえよ。お前はこういうところで真面目すぎるんだよ」

大平「こういうところだから真面目にしろよ！」

高木「まあまあ、二人とも。みんな、彼らが新しいプロデューサーだ。早速挨拶してもらおう」

安井「挨拶？こないだしただろ」

大平「社長と・・・は・・・は・・・」

安井「春香」

大平「ああ、春香と千・・・千種？と伊・・・伊月？だけにしかして無いだろ」

安井「千早と伊織な。お前名前覚える気ないだろ」

大平「あるよ！昨日の夜も名簿見てたよ！ただ・・・それが抜けただけだよ！」

安井「お前は寝ると何もかも抜けるんだよ！俺一人に任せてさっさとパンを袋につめる作業にもどれよ」

大平「やってないから。そんなバイトもしてねーよ」

安井「ああ、悪い。俺がやったバイトだった。お前はバーベルを上げ下げするバイトか」

大平「普通のジムの光景じゃねえか。そのバイトがあるとしたら何のバイトだよ」

高木「挨拶を・・・」

安井「第一、お前アイドルの苗字覚えてないだろ。春香と千早と伊織の苗字言ってみろよ」

大平「春香が・・・てんかい？千早は・・・読めない。伊織は・・・みずせだっけ？」

安井「春香はあまみだから。それ、昔の坊さんだから。千早は読めないって、きさらぎって習っただろ？そんでみずせて素直か。水瀬と書いてみなせと読むんだよ！小学校から勉強やり直せよ！」

大平「小学校は大丈夫だよ！中学は危ういけど・・・」

安井「とりあえず一発ヘッドショットさせろ。何かしら覚醒するかもしれないだろ？」

大平「やめろよ！お前のエアガンは改造されてるから当たると痛いんだよ！」

安井「改造じゃねーよ！強化だよ！」

なにやら勝手に揉めだした二人を見てアイドルたちに不安がよぎる。これまでのプロデューサーとは違う方向で危うい。その雰囲気を感じ

じた律子は二人に話しかけた。

「ええと、そろそろ挨拶のほうを・・・」

安井「あ？」

大平の胸ぐらをつかんで律子をにらんだその姿は完全にあっち系の人だった。律子は一瞬怯んだが、もう一度言った。

「社長が挨拶してほしいって言ってましたよね？ですから早く挨拶してほしいんですが」

安井「ああ、そうだったな。ほら、さっさとしろよ」

大平「え、俺からかよ？・・・えーと、大平です。右も左も分からないような新人だけど、よろしくお願いします」

安井「真面目すぎるだろww無いわーww」

大平「失礼な！ほら、お前の番だぞ？」

安井「あー。安井だ。ま、それなりに覚えてくれ」

真「・・・え？終わり？」

安井「終わりだよ。長々と語っても意味ないだろ？」

高木「あー、コホン。まあ、二人はこれまでのプロデューサーとは一味も二味も違う。・・・いろいろな意味でな。大平君は真面目で素直だ。どんなことにも一生懸命取り組んでくれるだろう。安井君は・・・マイペースなんだ。自分の仕事に一直線で周りの邪魔にも芯を曲げない。これまでにはいなかっただろう？」

安井「社長、ちよいと寝かしてくれ。寝不足なんだ」

大平「お前、また昨日Skypeでチャットしてたな？」

安井「もうすぐ強いところと対戦すんだよ・・・。作戦会議は大切だろ？」

大平「昨日じゃなくていいだろ。しかも俺、聞いてないし」

安井「お前が寝たのは知ってた。だから教えなかった」

大平「俺だけ作戦分からねえじゃねえか！負けるぞ！」

春香「確かにマイペース・・・だね？」

千早「ええ……。でも大丈夫かしら。やる気はそれなりみたいだけど……」

伊織「一番危ないのはみんな大平さんのほうへ行っちゃうことよね。ふてくされた安井さんがエアガンを連射とかしそう……」

高木「と言うわけだ。我々はともに頑張ってトップアイドルを目指さなければいけない。皆で力を合わせようじゃないか。今日はこれで終わりだから、あとは自由にしてくれ」

伊織「仕事はないのね……。だからこの前の仕事は大切だったのに！」

亜美・真美「ねーねー、大平にーちゃん、一緒に遊んでよー」

大平「12歳も離れた兄ちゃんか。よっしゃ、遊んでやる！」

亜美「やったー！」

真美「じゃあ、鬼ごっこ。にーちゃんは鬼ね！」

大平「いいじゃねえか。すぐに捕まえてやる！」

亜美「きゃっきゃっ」

真美「逃げろー」

亜美を追いかけている大平はちらりと安井のほうを見た。安井は机に突っ伏して寝ていた。いや、寝たふりをしていた。何かを考えているときはいつも安井はその姿だった。安井は朝6時までチャットしても眠くならないからだ。ただ、今日は何か深く考えているようだった。

雪歩「あ、あの……。安井さん、お茶でも……」

あちゃあ、と大平は思った。安井がこの状態のときに話しかけるのはご法度だった。アイドルたちにそのことを言い忘れていた。

安井は顔を上げるとこう言った。

「うっせーな！！寝てただろうが！！」

雪歩「うう、すいません……。こんなダメダメな私は穴掘って埋

まっていますうゝ・・・」

穴を掘ろうとする雪歩とそれを宥める真、そして再び突っ伏した安井を交互に見ながら、大平は気づいた。安井が考えていることにも、そして今の一件でますます事務所の雰囲気が悪くなっていることにも。亜美を捕まえて高く持ち上げていた大平は亜美を下ろすと、安井に近づいてこう言った。

「・・・いつものところに行くか」

安井と大平はバッティングセンターにいた。どちらかが悩むと、いつもここに来ていた。

120キロのスペースでバットを振りながら、安井は言った。

「・・・俺は馬鹿だな。学校で一通りのことは習ったから大丈夫だと思ってた。でも一番重要な人との付き合い方を俺は習わなかったいや、習ったけどすぐに頭ん中から出しちゃった。こんなもんいつ使うんだ。大人になって上司とか先輩と付き合い合っても所詮馴れ合いだと思っていた。だが、こんな突然必要になるときが来るとはな」ホームランを飛ばした安井に大平は言った。

「素直になればいいと思うよ。お前が思うように付き合い合えばいいと思う。アイドルたちはまだみんな若い。お前が態度を変えればきつとみんなも変わるさ」

「本当にそんな風に変わるのかな・・・いてっ！」

次の打球は地面に当たり安井の足に当たった。

大平「ほら。神様からの罰だ」

安井「そんな神様なんてクソ喰らえだ。・・・ほら、お前の番だ」

大平「よっしゃ。ホームラン飛ばすぞ！」

安井「相変わらず大振りだな。そんなんだから『ホームランか三振か』って言われんだよ」

大平「高校時代のフォームに戻すか。あの頃は『振れば安打』なんて言われてたなあ」

安井「そう言われながら最後の県大会で三振しやがったのはどのどいつだ」

大平「もう許してくれよ。・・・打ち終わったらスーツ買いに行くぞ」

安井「いや、もう一回だ。今度こそ全球ヒット打って商品もらってやる」

大平「・・・お前十何回それやって商品もらえなくなっただろ」

安井「・・・そうだったな」

二人は大声で笑った。安井の心の何かも笑い声に乗ってどこかに飛んで行ったような気がした、と大平は後に語っている。

翌日。アイドルたちは事務所に集合していた。

ひょっとしたら社長が依頼したケーブルテレビの仕事についての電話があるかもしれない、と小鳥から連絡があったからだ。

やよい「うっうー！半年ぶりのお仕事です！」

伊織「まだ分からないわね。お断りの電話だったら泣くわよ」

美希「あふう・・・。ところでプロデューサー達は？」

春香「なんか用事でちよっと遅れてくるって言ってたけど・・・」

そのとき、ノックの音がした。

コンコン。

？「社長、いらっしゃいますか？安井です」

アイドルたち「!?!」

ドアが静かに開き、スーツを着た安井が入ってきた。

安井「社長、向こうからの電話は？」

高木「い、いや。まだない」

安井「そうですか。あ、音無さんパソコン借ります」

少し遅れて大平が入ってきた。

大平「いや、すまん。ちよつと急用が入って。・・・ん？どうしたみんな？そんなモアイ像みたいになって」

春香「あの、やすい、さんが」

大平「安井がどうしたって？・・・ああ、なんか気持ちを入れ替えるって。で、今何をやってるんだ？」

安井「見りゃ分かるだろ。ケーブルテレビに抗議文を出してんだ」

律子「ええっ！？そんなことしたら・・・」

安井「向こうはこっちの様子を伺ってるに違いない。見知らぬプロダクションの急な依頼を簡単に受けて、自分たちのマイナスになったら目も当てられない。こっちがどうでてるかを見てる。だったら、あえて挑発してみるのもいいだろ」

春香「それで、なんて書いてるんですか？」

安井「将来大スターになるかもしれないアイドルたちに賭けてみるか、すでに有名なやつに高い金出して頭下げて出演交渉するかどっちが得かを理論的に説いてやった」

律子「・・・これはすごい。あとは向こうの反応しだいね」

大平「すごい！すごいが何を言ってるのか俺には分からん！」

安井「おい、脳筋」

大平「脳筋言うな」

安井「あとは電話待ちだ。喫茶店でも行くぞ」

亜美・真美「安井にーちゃん、遊ぼうよー」

安井「やだ。めんどい」

亜美「あー、さては・・・」

真美「大平さんより運動神経悪いからやりたくないんだろー」

安井「何？言ったな。速攻で捕まえてやる！」

亜美「わー、安井にーちゃんが怒ったー」

真美「逃げろー」

安井「ほら、捕まえた」

亜美「ぎゃー、捕まったー」

安井「ほら、高い高い」

亜美「わー！天井に手がつく！」

真美「真美も真美もー」

雪歩「あ、あの、プロデューサーさん・・・」

安井「ん？」

雪歩「お、お茶入れたんですけど・・・」

安井「そこに置いていてくれ。いい香りだな、玉露か？」

雪歩「い、いえ、普通の市販ですけど」

安井「そうか、やっぱ入れる人によって変わるんだな。はっはっは」

雪歩「あ、あはは・・・」

春香「変わったって言うか・・・吹っ切れた？」

千早「性格が破綻した可能性もあるわね」

伊織「性格破綻だったらあんなに会話が弾まないわよ」

そのとき電話が入った。

安井は真美を下ろすと受話器を取った。

「もしもし、765プロダクションの安井ですが」

「あ、私外海ケーブルテレビの山田と申します。例の話についてですが・・・」

安井「さっさと言ってくれ。どっちだ」

山田「その件についてなんです、申し訳ありませんが・・・」

安井「あ？あのメール読んでもそう思うのか。分かった、もういい。その代わりこっちも要求がある」

山田「え？」

安井「社長が話を持ち出して約1ヶ月。その間、仕事がかぶらないように何人か空きを作ってたアイドルもいる。そのアイドルへの賠償と、うちのプロダクションへの賠償。それで手を打つ」

山田「いや、あの・・・」

安井「できないんなら法的手段も辞さない。どうする？」

山田「・・・少々お待ちいただけますか？」

安井「ああ、何時間でも待ってやる」

山田「・・・もしもし」

安井「なんだ？」

山田「今、社内で話し合いを行いまして。社長が、そんなに言うならやってみようと」

安井「よし。収録はいつだ？」

山田「一応来週の方で」

安井「よし、分かった。すまなかったな、こんど飲みに行こう」

電話を切って安井は静かに丸印を表現した。

アイドルたち「やったあああああ!!!!!!」

伊織「前はキャンセルだったから・・・2ヶ月ぶりかしら」

真「そんなに出来ていいなあ・・・。僕なんか8ヶ月ぶりだよ」

春香「プロデューサーさん、プロデューサーさん!!」

安井「そんな遠まわしに呼ぶな。安井さんでいい」

春香「じゃあ・・・安井さん!どんな番組なんですか？」

安井「そうだな、よくある番組と一緒にインパクトがない。『今までにないアイドル番組』だな」

大平「よし、じゃあみんなで寿司でも食いに行くか!」

やよい「うっうー!お寿司ー!」

伊織「そうね、うちの行きつけの寿司屋に行かない？」

安井「そんな高級なところ行ってどうすんだよ。そういうところは
ゴールデン進出とかそういうときにとっておけよ」

伊織「へえ、最初の段階ですごい目標ね」

安井「所詮ケーブルテレビなんて踏み台だ。目標はあくまでゴール
デンだからな」

律子「・・・ところで安井さん」

安井「ん？」

律子「さっきの賠償とか法的手段とか。嘘ですよね？」

安井「もちろん。ああいうところは法律のことなんて知らないよう
なやつばかりだ。嘘並べて脅せばたいい折れる」

大平は安井の肩を叩いて言った。

大平「・・・な？変わっただろ？」

安井「ああ。素直なやつらだ。だが素直だから伸びるんだろ」

大平「まあな」

安井「こいつらはこんなところで留まる器じゃない。まだ、まだ大
きくなる・・・」

大平「よし、回転寿司行くぞ！持和も来るだろ？」

安井「急に下で呼ぶな。変な感じになるだろ、一」

大平「お前もじゃねーか。しかも明らかにあと付けじゃねーか」

安井「よし、行くか。金は一箇所コネがあるからそこに頼むか」

大平「あー。また橘か？」

安井「ああ。じゃあ行くか」

いよいよアイドルたちの新番組が始まる。

その名も『IDOLM@STER TV』。

その初回が衝撃の展開になるとは寿司に浮かれたアイドルたちには知る由もなかった。

第三話「新番組スタート、そして」

ある日の765プロは盛り上がっていた。

765プロとしての社運と、アイドルの将来にかかわる番組がいよいよスタートするのだ。

番組名はその名も

「IDOLM@STER TV」

・・・特にひねりもないが気にしないこと。

その司会としても、安井と大平が任されることとなった。

安井「司会としてやるからには、好きなことやらせてもらいますよ」

高木「ああ、いいだろう。うちのアイドルは丈夫さが取り柄だ、怪我なんてめったにしない。最悪死ななければいいさ」

大平「・・・俺は安井が行きすぎたら止めに入る役に徹します」

番組収録を明日に控え、765プロのアイドル総勢13人は緊張と興奮が高まっていた。

ただ・・・

亜美「んっふっふ、また1位・・・んなぁあっ!？」

真美「残念だったな亜美、最後までとっておいた赤こうらが火を噴くぜ!」

安井「いいな、上位争いは」

亜美「安井兄ちゃんは何位？」

安井「11位だよ」

真美「安井兄ちゃん、意外と弱いね」

安井「あー、FPSやりてえ」

・・・まったく緊張感がなかった。

それを撮影する少女。

「・・・アイドル事務所の実態を見せる？」

水谷絵理。彼女は765プロの所属ではない。

伊織「・・・で、何で876勢が混じってるわけ？」

高木「実は安井君に直談判されたんだ。この番組は765プロだけじゃない、少なくとも関係あるところにも門を開くべきだね。そこで、876の三人を紹介したわけだ。どうも、安井君は三人を気に入ったようだね」

伊織「そりゃあ、気に入るでしょうよ。何も考えず突っ込むやつに元引きこもりに元女装アイドルなんてキャラとして最高だからね。テレビに出てなくても、春香の何倍も目立つわよ」

春香「はっくしょん！」

千早「大丈夫？風邪でも引いた？」

大平「涼！緑だ！緑を出すんだ！」

涼「緑だけありませんよ？」

大平「何だよ！緑が出たら一気にいけるのに！」

響「UNOでそういうの言ったら致命的だと思うぞ？」

そして、16人のアイドルたちは収録の準備のため、市内のホテルへと向かった。

誰一人、安井の策略に気づかずに。

その夜、安井と大平はホテルの廊下にいた。

そのフロアは、まさに今アイドルたちが明日の収録に向けて就寝しているところだ。

明日は収録などない。

今日の夜が正しいのだ。

アイドルにはよくある「寝起きドッキリ」。

安井の脳内にはそのことが浮かんだが、所詮二番煎じにしかならないと考えていた。

そのとき、あることをひらめいた。

そのうちやるのが二番煎じなら、番組の初回にやるのはどうだ。

まさか、過去にそんな番組は存在しないだろう。

そして大平とともに、夜のホテルに入った。

大平「そんな装備で大丈夫か？」

安井「大丈夫だ、問題ない。何のためにこのホテルにしたのか分かってるだろ」

大平「・・・有名なロックバンドが泊まったりした所だって聞けばな」

安井はバズーカを持っていた。

寝起きドッキリではおなじみの大きな音が鳴るバズーカだ。

ただし、ほかのアイドルが起きれば番組は大失敗。

そのために、防音に定評のあるこのホテルを選んだのだ。

安井「じゃあ、行くぞ。まずはこの部屋だ」

シティホテル5階、501号室。天海春香の部屋だ。

そっと入ると春香は布団で熟睡している。

まずは寝起きドッキリ恒例の物色だ。

安井「なんか菓子の袋がいっぱい落ちてるな」

大平「ゴミ箱に入れようぜ」

安井「人気は増えずに体重が増える、と」

大平「誰が上手いこと（ry」

安井「ところで、ベッドに寝てんのは本当に春香か？」

大平「リボンで判断するんじゃないよ」

そしてセッティング。

安井がバズーカを構え、準備は整った。

大平「よし、行くぞ。カウントダウン開始」

大・安「5・4・3・2・・・」

ドォーン！！

春香「ひゃあああああああ！？」

飛び起きた春香にマイクを向けて、安井は言った。

「おはようございます」

春香は若干寝ぼけた様子でこう言った。

「ふあい……。おふあようございまふ……」

大平「完全に寝ぼけてるな」

安井「春香、あれ見ろ」

それはテレビカメラ。

安井の友人でカメラマンの西村と言う男が撮っている。

春香「……？」

まだ寝ぼけていた春香だったが、カメラを見て様子が変わった。

春香「・・・！？あ、あいつ！おはようございます！」

大平「おお、いつもの春香に戻った」

安井「あれだよ、ドッキリだよ」

ベッドに崩れ落ちる春香を見て安井はこう言った。

「じゃあ、おやすみ」

春香「！？」

あわてて春香は安井を捕まえる。

春香「私の出番、もう終わりですか！？」

安井「ああ、終わりだ。まあ、どうしても言うならついてきてもいいぞ」

・・・春香は悩んだ挙句ついて行くことにした。

次は502号室。如月千早の部屋だ。

そっと入り早速物色を始める。

安井「歌詞カードが置いてあるな」

春香「ほら、千早ちゃんは歌が大好きですから」

大平「牛乳は関係あるのか？」

春香「・・・察してください」

安井「・・・把握した。考えろ、脳筋」

大平「脳筋言うな」

まあ、それはそれとして。

そのあとは同じである。

千早「な、何です！？いきなり人の部屋に入ってきて！春香まで！」

春香「千早ちゃん、あれあれ」

春香はカメラを指差した。

千早はそれを見ると呼吸を整え、こう言った。

「おはようございます、安井さん、大平さん。春香も今日は早起きね」

安井「・・・編集点作ろうとしたな」

千早「・・・できれば先ほどの様子はカットで」

安井「ノンフィクション、ノーカットで届ける予定だ」

その後もバズーカの音とアイドルの悲鳴がこだました。

「ひゃあああああああああ!？」

「うわあああああああああ!！」

「ぎゃおおおおおおおおん!！」

安井「・・・と言うわけで、今日から始まった『IDOLM@STER TV』、略して『アイマスTV』。いかがだったでしょうか。こんな感じで、アイドルの素の姿をさらけ出して行きたいと思います」

春香「・・・えっ!?! 終わり!?!」

安井「初回はアイドル寝起きドッキリをお送りしました。不定期ゆえ、次はいつ会えるかわかりませんが、もし次の機会があったらまた見守っていただければ幸いです。ではまたいつか会いましょう。さよなら」

串本ディレクター「はい、OK!」

安井「しかし、あの串本がいつの間にか番組のディレクターとはなあ」

串本「ちっぽけなケーブルテレビぐらいしかまだ仕事がないけどな」

安井「なあに、あと半年もすれば大手テレビ局から引っ張りだこさ」

串本「期待していいんだな?」

安井「ああ、任しとけ、くっしー」

律子「・・・安井さん、いくつかお聞きしたいことが」

安井「説教なら聞かねえぞ」

律子「いえ、本当に今回はこれで終わりですか?」

安井「たった今別れの挨拶しただろ」

やよい「うっうー、番組の最初の企画がいきなりドッキリって・・・」

大平「何、心配すんな。安井には考えがあるからこんな賭けができるんだ。ただの司会だったらいきなりドッキリなんて持ってこないだろ？」

雪歩「うっ、えぐ、怖かった・・・」

伊織「この馬鹿デューサー！いきなりこんなことして人気が出るわけないでしょうが！」

安井「でも一番面白かったのは伊織だったな。まさかベッドから転げ落ちて、泣くとは思わなかった」

伊織「普通そうなるでしょ！人の安眠妨げるなんて最低よ！底辺よ！」

安井「んなもん中学、高校と言われたことある。番長やってた地点で社会の底辺だろうが」

大平「とりあえず、みんなお疲れ。おのおの部屋に戻って、自由にしている」

千早「安井さんと大平さんは？」

安井「俺たちはこれから重要な会議がある」

春香「こんな真夜中に？」

安井「ああ、だからお前らは気にせず休んでろ」

部屋に戻った春香だったが、安井たちが気になって眠れない。

まもなく、ドアをノックする音が聞こえた。

千早「春香、起きてるかしら？」

春香「あ、千早ちゃん。起きてるよ」

千早「安井さんたちのことが気になって。ちょっと様子を見に行かない？」

安井たちは会議室にモニターを持ち込んでいた。

春香と千早はドアの隙間から中をのぞいた。

橋爪プロデューサー「この子は面白くないなあ、カットかなあ」

安井「全部放映しないと面白みは湧かないでしょう。そもそも美希は普段からよく寝てますし」

橋爪「そうは言ってもなあ……。串本君はどう思う？」

串本「俺は安井の意見に賛成です。すべて見せてこそ、アイドルのありのままを見せる番組だと思います」

大平「どうしても、と言うなら我々が独自でDVDでもつくって売りましょう。どうですか」

橋爪「……。分かった。すべて放送しよう」

安井「ありがとうございます」

橋爪「ただし、そこまで言ったからには、視聴率が悪かったときの責任はとれよ」

安井「重々承知の上です」

橋爪「よし、ご苦労様。串本君、帰るぞ」

安井「……。おい、あんなんの腰巾着になるなよ」

串本「もちろんだ。いずれあいつを抜くつもりさ。じゃあ、また次の機会に」

安井「ああ」

大平「ああ、疲れたな。よく30年もやってるやつに反発できるな」

安井「あのじじいは腰巾着で生きていたようなやつだよ。お偉いさんにくっついて上がってきたのさ。そんなやつは俺から見たら石ころレベルさ」

大平「あ、ああ、そうか」

安井「さてと……。春香、千早、いるんだろ？」

春・千「!？」

安井「えらい前から覗いてご苦労なこっちゃ。コーヒー入れたら飲むか？」

春・千「……。はい！」

数日後。

外海ケーブルテレビにてアイマスTVの初回が放送された。

765プロでも皆でそれを見た。

寝ぼけた春香に笑い、編集点を作ろうとした千早に笑い、ベッドの下にもぐりこもうとした雪歩に笑い、ベッドから転がり落ちた伊織に笑った。（当事者たちはどうか知らないが）

翌日、安井は電話の前にいた。苦情が来たら軽くあしらうつもりだ。やがて、電話が鳴った。

安井「はい、もしもし。765プロダクションの安井です」

住人A「安井？司会の人かい！？いやー、最高だったよ！初回だからアイドルの自己紹介でもやるのかと思ったたらいきなりドッキリなんて！しかもみんな個性的で笑っちゃったよ！」

安井「ありがとうございます」

住人A「次回も期待してるよ！」

安井「あ、ちなみに次回からは土居中ケーブルネットってところに変わるんでよろしくお願いします」

律子「今の電話は？」

安井「視聴者からお褒めの言葉をいただいた」

アイドル達「やったー！！」

律子「それはいいとして、最後なんて言いました？別の会社に乗り換えるんですか？」

安井「ああ、そうだ。俺はあの社長とは馬が合わない。その点土居中の社長は二つ返事で認めてくれた。だから乗換えさ」

律子「でも、土居中CNって新生の会社ですよ？まだ会員も少ないからきついのでは・・・」

安井「先手は打ってある。うちの事務所の中外に土居中のチラシを貼る。あと、ティッシュ配りをするが、そこにうちの事務所と土居中の名前を入れておく」

律子「ティッシュ配りの仕事？」

安井「大平と涼と愛と真に行かせたよ。もうすぐ帰ってくるはずだ」

大平「へーい！ただいまー！」

春香「大平さん、機嫌いいですね」

大平「そりゃそうさ！街中でティッシュ配ろうとしたら、昨日の番組面白かったとか、また見たいと言われちゃって！ティッシュをもらうための行列ができたぐらいだぞ？」

真「あんなに人が集まったの、いつ以来かなあ？」

涼「ライブよりも人が来てたかも！」

愛「ティッシュも完売、評判も上々！この調子でいきましょう！」

その後も電話がきたが、どれも番組を評価するものだった。中にはやりすぎと言う批判もあったが、初回はどうやら最高の出発だったようだ。

まもなく、安井の携帯に串本からメールが届いた。

「橋爪の爺さん、大喜びだ。次もぜひ頼むって言ってたぜ」

安井はこう返信した。

「あんたと組むのはこれっきりだって言っとけ。次からは横山って言うやつと組むとな」

横山は、安井の1年後輩だ。マスコミ関係の仕事につきたいと言って、テレビ局に入りあつという間に番組のプロデューサーとなった男だ。

安井は年の功より、見知った仲間を選んだのだ。

ただし、アイドル達には内緒である。律子にばれたら、なんて言わ

れるか分からないしね。

とにかく、アイマスTVは最高の船出となった。だが安井は、新しいことを考えていた。

とりあえず絵理にネットアイドルとしての活動を再開するように言ったのもそのためだったし、大手テレビ局に行き武田蒼一と言う番組プロデューサーに会ったのもそのためだった。

まもなく安井はEメールを書き始めた。その文頭はこうである。

「前略、鈴木彩音様、桜井夢子様へ

I D O L M @ S T E R T V 出場権獲得のお知らせ」

第四話「パイプの整備」(前書き)

春香…こんにちは、天海春香です。安井さんが急に書道をはじめて社訓みたいなものを書きました。二つ書いてあって一つは「アイドルは仕事を選ばず拒まず笑顔で元気に」もう一つは「パイプは何も流さなければただの筒、何か流せば長く使える」。前者は安井さんがしょっちゅう言っています、後者は意味が分かりません。・・・
876のことかな？

第四話「パイプの整備」

ある日の765プロ。

亜美「仕事が入ったって本当!？」

真美「しかも二人で!？」

律子「亜美一人はもったいないって安井さんが……。もう隠さずに全部さらけ出せとも言ってたわね」

響「要するに隠し要素が出たみたいなことだろ？」

律子「あんたは黙ってなさい」

貴音「して、プロデューサー殿は？」

律子「なんか絵理と涼連れてどっか行ったわよ。何をする気かしら。あの発言も気になるし……」

真「あの発言？」

律子「言ってたのよ、安井さんが」

「パイプは何か流せば2, 30年は持つって」

ガチャッ。

安井「アミーゴ、お前ら。いい知らせといい知らせ、どっちを聞きたい？」

律子「選択肢が一つしかありませんけど」

安井「いや、二つだよ。内容はまったく違うから」

律子「じゃあ、どっちからでもいいです」

安井「一つは土居中のほうが2時間ぐらいの枠くれるんだと」

律子「2時間枠ですか？すごいじゃないですか！」

大平「やったの俺!やったの俺！」

安井「黙ってろ、脳筋」

大平「脳筋じゃねー!お前は脅そうとしたから俺が優しく取りまとめたじゃねーか！」

安井「脅してねーよ。単に条件を突きつけたただけだろ」

大平「条件ひどかっただろ。まあ、それでレギュラー枠取ったけど」
春香「えっ！？レギュラー枠ですか！？」

安井「今は番組がないから。将来の人気アイドルがうちのケーブルテレビから出たらうちとしても鼻が高いとか」

律子「結構重要なことをさらっと言いましたね」

安井「あとで伝えといてくれ」

千早「みんなに聞こえてますよ。向こうでお祭り騒ぎになってますよ」

安井「あれだな、踊る阿呆に見る阿呆ってやつだな」

律子「そう言えば絵理と涼は？」

安井「そうそう、それはもう一つの話だ。実は絵理と涼の友人でいいやつを教えてもらった。一人はネットアイドルで、絵理の後輩だそう。もう一人はアイドルだが、ある理由で今は路頭に迷っているやつだ」

大平「安井曰く磨けばダイヤモンドになるそう。よし、じゃあ見てもらおうか。おーい！」

ガチャッ。

ドアがわずかに開き、中を覗く二つの目が見えた。

安井はその扉を思いっきり開けた。

外の二人はすぐに隠れたが、安井に強引に前に引き出された。

安井「はい、この二人がそう。自己紹介頼んだ」

？「え、えーと、サイネリア、デス・・・」

安井「本名でok」

？「ええー・・・。え、えっと、鈴木彩音、デス・・・」

大平「まあ、彼女はネットアイドルだから。あまり人前に出るのは得意じゃないんだ。しかもほとんどが初対面。緊張するのも無理は

ないだろう。ちなみに絵理の紹介な」

絵理「・・・後輩だけど年上？」

安井「18歳だったか？」

律子「え、同年？」

あずさ「あらあら、絵理ちゃんと同年だと思ってたわ」

貴音「私の1歳年上とは思いませんでした。服装が関係あるのかもしれないですね」

安井「まあ、それもあるかな。じゃあ、次」

？「・・・桜井夢子です」

千早「・・・！知ってます」

真美「真美も知ってる！『オールド・ホイッスル』に何度も出てた人だ！」

大平「ああ、そうらしいな。ただ、大人の事情とやらで落ちぶれて、路頭に迷っていた、って言うのは安井が言ったな。それで、涼からそれを聞いた安井がうちで再スタートさせるからって、涼に連れてこさせたんだ」

安井「よし、お前らよく聞け。もし、嫌ならここで嫌って言うてくれ。俺は素直に応じる。むしろ、そう言うのを隠していると仕事にも支障が出るから、ぜひ言うてほしい。そのほうがこの二人にもいいだろう。さあ、ジャッジメントタイムだ」

アイドル達「・・・」

春香「彩音さん、夢子さん・・・」

社員一同「ようこそ、765プロへ！！」

彩・夢「・・・!!」

安井「よし、決まりだ。これからお前らはうちの仲間だ。どんなことでも相談しろ。金のことでもいいぞ」

大平「もう橘いびりは辞めろよ・・・。野球選手＝金持ちじゃねーんだから」

やよい「うっうー、彩音さん、夢子さん、よろしくお願いします!」
千早「これからは仲間であり、ライバル・・・。お互いに頑張りますよう」

真「へへっ、やーりい!もつと事務所がにぎやかになりそうだ!」
貴音「鈴木彩音、桜井夢子・・・否、彩音殿、夢子殿。これからともに切磋琢磨して頑張りますよう」

律子「やれやれ、また騒がしくなりそうね。何はともあれ、よろしくね」

安井「よっしゃ、寿司行くぞ寿司。二人の加入祝いだ」

大平「回転寿司だけどな!って痛っ!」

安井「余計な事言わなくていいんだよ、この脳筋豚野郎!」

大平「金髪豚野郎みたいに言うんじゃねー!」

絵理「サイネリア、今日から一緒にがんばろ?」

彩音「・・・はい、センパイ・・・!」

涼「夢子ちゃん、今日から一緒だね!みんなで頑張ろう、って痛っ!?!」

夢子「な、何を言ってるのよ!私はここからまた芸能界のトップへ躍り出るのよ!あんたよりも先にね!」

安井「よし、回転寿司じゃなくてちょっと高いところ行こうか」

大平「マジか。また橘の財布いじめか」

伊織「そんな部外者に迷惑かけるならうちが出すわよ。今日は記念日でしょ？」

亜美「回ってないお寿司に行けるの・・・？」

真美「真美たち、死ぬの・・・？」

安井「生きる」

今日は二人、仲間が入った。

鈴木彩音はネットアイドルであり、これからはアイドルとしても活動することになる。

・・・絵理とかぶるな。まあ、大丈夫だろう。二人で一人みたいなもんだ。

桜井夢子は元アイドル。・・・じゃなかった、アイドルだ。落ちぶれただけでアイドルを辞めてはいない。

涼の存在がいい発火剤になっているようだ。いわゆるツンデレってやつだ。

にしてもいい寿司屋だった。良心的な値段だったし。今度小鳥さんと行ってみようか。

（2010年4月某日、安井の日記より）

安井「そうそう、あの二人は876所属になるから」

春香「ようこそ765プロへ、って言っちゃったのに・・・」

大平「今ほとんど一緒だからいいんじゃないね？」

安井「今、パイプは絶賛稼働中だな」

春香「・・・なるほど、最初の社訓っぽいものはそういうことだっ

た
ん
で
す
ね
」

第五話「とりあえず放送事故だけなければいい」

安井「だーっ、また赤こうらかよ！」

亜美「安井兄ちゃんって頭いいけどゲームとか苦手だよねー」

真美「ゲームも結構頭使うのにねー」

安井「TVゲームじゃあんまり勝てないな。サバイバルゲームだったら得意だが」

亜美「どうでもいいけど兄ちゃんまた最下位だよ？」

安井「あー、もういいや。大平、代われ」

大平「よーし、あいつに勝てるのはこれくらいしかないからな。しっかりついてこいよ？」

真美「それはこっちのせりふだ！」

亜美「大平兄ちゃんもコテンパンにしてやるー」

律子「安井さん、ちょっと」

安井「なんだ？」

律子「2時間枠をとったと言うのは本当ですか？」

安井「ああ、マジだ。土居中の社長も乗り気だったし」

律子「それから・・・私に内緒でスタッフとか代えました？」

安井「代えたよ。もうろくじじいや腰巾着に頼るくらいなら見知った無名の友人のほうがいいと思って」

律子「はあ・・・。別に悪いとは言いませんがあんまりそういうことをやっているとな事務所にも影響が出そうで・・・」

安井「大丈夫だ。だいぶ連中とは仲良くしてるから。事務所に何かあったら、俺に言えって怒鳴り込んでやるさ」

律子「そうですか・・・（余計大変なことになりそうだけど）。ところで、収録はいつですか？」

安井「収録？」

安井「まだお前らはベクトルが定まってない。あらゆることに対応できるアイドルとして育ててほしいんだ」
なんだかんだで丸め込まれたアイドル達は現場へ向かうこととなった。

安井「マイクロバスを用意してやった。喜べ」

大平「お前じゃなくて橘の手柄だろ・・・」

安井「よし、乗り込め。現場に行くぞ」

数十分後。

安井「よし、ついた」

春香「安井さん、ここって・・・」

千早「・・・採石場？」

安井「その通りだ。スタジオより安上がりだし、汚しても怒られないぞ」

春香「でも、どうせならスタジオでやりたいなあ・・・。転んだら痛そう」

大平「あー、疲れた。長距離トラックのバイト以来だよ」

愛「すごいです！大平さんってバスとか運転できるんですね！」

安井「大型免許とったのっていつだった？」

大平「4年前かな・・・。長距離トラックのバイトに必要だったから」

安井「と言うことは中型免許は持っていないのか？」

大平「持ってるよ。去年とったよ。ていうか持っていないとマイクロバスを運転できないだろ？」

安井「よし、全員集合。話がある」

安井「実は衣装の小山ってやつが番組用のTシャツを作ってくれた。それを着て今回はやるぞ」

春香「これだったら・・・汚していいんですかね？」

安井「Tシャツにプリントしただけだから問題はない」

大平「じゃあ、セットの準備するから待っててくれ」

春香「あー、やだなあ」

伊織「こんなことやるのが？」

春香「間違えたときに泥があまりつかなかったら・・・場がしらけちゃう！」

伊織「もう気持ちを切り替えてるのね・・・」

安井「よし、OKだ。西村、カメラの準備出来てるか？おい、大平、早くこっち来い」

大平「俺たちだけで撮るのか？」

安井「金八方式だよ。俺たちが番組タイトル言ったらあいづらがこっちに走ってくるっていう設定だよ」

串本ディレクター「よし、いくぞー、5, 4, 3・・・」

安・大「アイドルマスターTVー!!」

アイドル達「わーっ!」

春香「のわっ!？」

どんがらがっしゃーん!

串本「はい、春香さん転んだのでカットー!」

安井「やりやがったwww」

大平「笑ってやるなよ・・・。心配してやれよ」

春香「うう、やっちゃった。怪我してないけど心が痛い・・・」

串本「もう一回行きまーす!」

安井「春香、気にすんな。よくあることさ、お前には。よし、もう一回行くぞ! さっきより声を大きくな!」

串本「はい、カット！OKです！」

春香「うう、終わった。本当にやっちゃったよ・・・」

伊織「足だけしか汚れてないって芸人だったら大失敗ね。千早や愛みたいに顔面から飛び込むとか見せ場を作りなさいよ」

春香「あわてて顔に泥を塗るっていうのも考えたんだけど・・・なんかこれはこれでおもしろいかなと思って」

伊織「まあ、私はこうして綺麗なままね。千早たちはお気の毒だったわね」

千早「・・・」

春香「わっ！千早ちゃん！？」

伊織「な、何よ！いたなら何か言いなさいよ！」

千早「・・・私・・・」

千早「何か、新しい自分を見つけた気がする・・・！」

春香「千早ちゃん、ダメ！そっちに行ったら戻れなくなるよ！？」

伊織「あんたは歌だけに集中しなさい！」

安井「おーい、千早。雪歩や愛や美希はみんなシャワー浴びたぞ。

後はお前と真だけだ」

千早「はい、今行きます」

大平「ところで、俺のチュートリアルはいるのか？」

安井「笑いが取れたからいいだろ。新撰組くらい覚えておけ」

大平「油小路の変なんて聞いたこともねえよ！誰だ、伊東甲子太郎って！藤堂平助も服部武雄も毛内有之助も知らねえよ！」

安井「じゃあ、説明してやるからそこに正座しろ」

大平「砂利だらけのところに正座って、軽い拷問だろ！」

安井「よし、シャワーも浴びたな。残りはライブやるから、順番を

決めとけよ」

春香「え？」

律子「安井さん、事前計画書には記入されていませんが・・・」

安井「ああ、内緒にしておいた。事前に知らせなくても、真のアイドルだったら準備が出来てると思ってな」

伊織「まさか歌わせてもらえるなんてね。マイクにクラッカーが仕込んであるとかそういう事はないのよね？」

安井「ない。素直に歌ってくれればいい。セットが完成したら始めるから、それまで音程でも準備しとけ」

春香「ギクッ」

彩音「あのー、私持ち歌とかないんデスケド・・・」

安井「あー、そうだったな。絵理、ちょっと」

絵理「？」

安井「サイネリアと一緒に歌ってくれ。ネットアイドル同士、通じ合えるだろう？」

絵理「・・・大丈夫です。サイネリア、一緒にがんばろ？」

彩音「・・・はい、センパイ！」

大平「そう言えばサイネリアって絵理より年上なのに絵理のこと『センパイ』って呼ぶんだな」

安井「何だ、知らねえのか。ネットアイドルとしてはたしか絵理の方が先にやってたからそう呼ぶんじゃないか？　そう言うところに気を使わないとモテねえぞ？」

大平「余計なお世話だよ。お前だって前の彼女に『頭脳は一流だけど恋愛は三流』とか言われて振られたじゃねーか」

安井「あ？　何だやる気か？　人の傷口に塩すりこみやがって」

大平「ほんとのこと言って何が悪いんだよ、そもそも学校のマドンナと付き合ってたのに我俣だから振るとか訳がわからねえんだよ！」

安井「そんなんだからてめーはモテねえんだよ！　学校のマドンナだから我俣でもいいってか？　そんな訳あるか！　だからお前は8股かけられるんだよ！」

大平「お前も俺の傷えぐってんじゃねーか！久々にやるか？」

安井「いいじゃねえか、高校時代の決着といこうや」

大平「やってやろうじゃねーか、高3のとき以来か？あの時は先公が入ったから決着つけられなかったが、今日ここでつけてやるぜ！」

春香「安井さん、セットの準備が・・・安井さん！？」

安井「ああ、春香すまねえ。救急箱持ってきてくれねえか？」

大平「今回も引き分けか。いつ決着がつくんだろうな」

安井「決着なんてつかなくていいさ。決着ついたら俺たちはきっと離れ離れになっちまうぞ？」

安井「えー、すまなかった。心配かけたか」

伊織「いい年して喧嘩って、あきれて物も言えないわよ」

安井「男と男の意地のぶつかりあいだ。別に気にしないでいい。さて、セットも準備できたし、今からライブを行う。観客は、この番組を見てるテレビの前の人たちだ」

春香「ところでなんで私たちはずっとステージを見つめさせられてるんですか？」

安井「観客はペンライトとか振ってくれる。ペンライトはないが代わりの物はある。全員、回れ右」

伊織「え？何でそんなこと・・・」

大平「いいから、いいから」

アイドル達は言われたとおり回れ右をしてステージに背を向けた。

そこには・・・

春香「うわあっ！綺麗！」

街の夜景が眼の前に広がっていた。

律子「なるほど、わざわざ夜まで収録を長引かせたのはこのためだったんですね」

大平「大変だったんだぜ？安井と一緒にあちこち回って、夜景が綺麗に見えるところ探して。この採石場が一番よかったんだ」

安井「ペンライトの代わりに街の明かり。観客の代わりに街の家々だ。街中に響き渡るようなライブ、頼んだぞ」

アイドル達「はいっ!!」

こうして収録は終了した。

後日の放送は大成功だった。ケーブルテレビ会員の8割が放送を見たそう。事務所には、「素敵な演出だった」「あの子の歌がよかった」「笑いと感動がもらえた」「春香さんが面白かった」などの電話が相次いだ。

数日後。

亜美「見て見て、兄ちゃん！新聞に番組のことが載ってるよ！」

真美「『ケーブルテレビとしては異例の視聴率』だってさ！」

安井「あー、よかったな。よくあんなの取り上げてくれたな」

亜美「そう言えば、ネリアちゃん歌上手かったよね！」

真美「はるるんより上手だったかも！」

春香「はいはい、どうせ私はお笑い担当ですよ」

安井「ネリア？ああ、サイネリアのことか。俺もびっくりしたけどな」

大平「絵理とのコンビネーションも拔群だったし。ダイヤの原石つてごろごろ転がってんだな」

安井「本人はセンパイの邪魔したんじゃないか、とか言ってたけどな。今日事務所来るかな？」

ガチャッ。

彩音「おはようございまふ〜・・・」

安井「おお、来たか。えらくやつれてるがどうした？」

彩音「放送後にブログにすごいコメントが来て……。コメント返信してたら朝になっちゃって……」

大平「……と言うことは絵理もか」

彩音「センパイは『寝落ちするから後よろしく』って……。あたしも寝落ちしますう……」

亜美「あーあ、ネリアねーちゃん、寝ちゃった」

真美「一緒に遊びたかったのに」

安井「後にしとけ。代わりに遊んでやるから」

亜美「よーし、またマリカーでけちよんけちよんにしてやるー!」

真美「大平兄ちゃんもやろうよー」

大平「よっしゃ、今度は安井も含めてやつつけてやるぜ」

ガチャッ。

串本「おっす、やっさん、はじめちゃん。すごい反響だ、俺も注目されてるよ」

安井「くっしーか。わざわざ事務所に来るとは珍しいな、何のようだ？」

串本「実はな、TVSがケーブルテレビで8割取った番組を流したって。ケーブルで8割取ったなら、地上波でもそれなりに取れるんじゃないかって」

安井「そんな上手く行くわけねえだろ。まあ、どうしてもっていうならいいぜ」

串本「あと、何か言いたいこととかは？」

安井「編集せず、そのまま流すならいいって伝えてくれ」

串本「……分かった。交渉してみる」

安井「……TVSか。最近視聴率が低迷しているとか言ってたが、まさかケーブルテレビにまで頼ってくるとはな」

亜美「兄ちゃん、早くやろうよー」

安井「ああ、悪い。よっしゃ、このまま大平をはめ続けてやる」
大平「イジメ、格好悪い！マリカーの目的が間違ってるだろ！」

第六話「昔は名作続き、最近は迷作続き」

亜美「安井兄ちゃん、大手テレビ局が来たって本当!？」

安井「正確には依頼が来た。地上波で流したいってな」

真美「あの時言ってくればよかったのに!なんかくっしゅんと話してたから重要な話だと思って聞かなかったんだよ？」

安井「くっしゅんって誰だ」

亜美「串本さんのあだ名だよ!」

大平「おっす。地上波記念って言うことで親父がなんか送ってきてくれたぞ」

安井「どれどれ」

亜美「なにこれ？」

安井「日本酒だな。765プロは未成年ばかりっていうのをお前の親父は知らないのか？」

大平「多分社長への差し入れだと思うけど・・・」

ガチャッ。

春香「おはようございます!あの放送、ゴールデンになるんですか!？」

安井「ああ、まだ交渉中だが。交渉が成立すれば深夜だが放送するらしい」

春香「うう、私の泥のところはカットしてほしい・・・」

美希「春香の歌をカットするべきだと思うな」

春香「美希ーーーーー!!」

美希「あはは、逃げるのー」

千早「おはようございます、安井さん。朝からにぎやかですね」

安井「にぎやかなのは亜美真美とはるみきだけだ」

千早「あ、そう言えば安井さん、安井さんにお客さんですよ」

安井「客？」

千早「ええ、何でも安井さんと話がしたいとか」

安井「まあいいや。入れてくれ」

？「このやろー！！」

安井「おっと」

怒号とともに飛んできた跳び蹴りをかわす。

安井「何だ、一流野球選手で坪倉キャットハンズのエースの橘さんじゃないですか」

橘「そう言うあんたは高校時代ドラフト候補にも挙がった現在注目ナンバー1のプロデューサー、安井さんじゃないですか」

大平「長ったらしい説明だなあ・・・」

亜美「大平兄ちゃん、今のどう言う意味？」

大平「要するに、どっちもすごいってことだ」

安井「で、何だ。金か？」

橘「んな訳あるか！これまでいろんなことをやってやってんのに何のお礼もないじゃん！その真意を問いに来たの！」

安井「出世払いだっつってんだろ」

橘「じゃあ、もうそれでいいわ。あと、勝手にうち宛で領収書書くのやめてくれない？」

安井「奈良時代から続く名門貴族がなに言ってるんだ」

橘「それはそれ、これはこれ！何であんたの晩飯の代金まで払わなきゃいけないのよ！」

安井「あ、それはアイドル全員連れて寿司行った時ので俺だけじゃ

ないぞ？」

橘「あ、そうなの？ごめん」

安井「別に」

橘「・・・それで話はそれだけじゃなくて。例のテレビの話なんだけど」

安井「何だ、テレビ局を買収したのか」

橘「買収じゃなくて株主になったただけだけど。それでテレビ局員の代役でここに来たんだけど」

安井「それだけ赤字か。まともな局員はみんなほかに流れたのか」

橘「そうじゃなくて、あんたの交渉術は皆恐れてるから。大学時代の友人関係で代役やってるだけよ」

安井「で、なんだ。やっぱり無理とでもいうのか？」

橘「いや、その通りにするって。ただ・・・」

安井「ただ？」

橘「もし視聴率がよかったら、うちでレギュラーにさせてくれって」

安井「別にいいよ。どこでもうちのアイドルは仕事するし」

橘「じゃあ、そう伝えておくわ」

安井「ところでお前、また太ったんじゃないのか？『投手界のおかわり君』なんて言われるぞ？」

橘「なんですってー！？野球選手に対しての発言じゃないし、なにより女性に対して失礼な質問でしょ！？」

安井「野球選手になって焼肉とかプロテインばかり食ってるからだろ」

橘「・・・一回死んでみる？」

安井「やってみろ」

橘「・・・いいわ、もう。なんか疲れた。そのうちに野球で勝負よ」
安井「うちの高校にボコボコにされてマウンドで泣いたくせに。また泣かせてやろうか？」

橘「安井ー！ー！！！」

安井「おお、こわいこわい」

千早「なるほど、どこかで見たことあると思ったら野球選手だったんですね」

大平「かたや球界二人目の女性投手で今では球界に欠かせない存在、かたや小さな芸能事務所のプロデューサーだもんなあ・・・」

春香「小さな芸能事務所って・・・まあそうですけど」

安井「はー、やれやれ。大学のとくとまったく変わってないな」

春香「ところで何の話してたんですか？」

安井「ああ、全員が来たら話す」

伊織「思わず事務所に来ちゃったけど、仕事はないのよね」

響「いいじゃないか、みんなと遊べるんだぞ？」

安井「よし、全員来たな。じゃあ、さらっと用件を述べて、後は自由行動だ。まず、深夜だが放送が決まった。一週間後だそうだ」

アイドル達「おおー！！！」

安井「それからたいした話じゃないんだが、これの評判がよかったら深夜でレギュラーにするそうだ」

アイドル（ry「ふーん・・・」

アイ（ry「え！？」

安井「話は以上。じゃあ自由行動な」

春香「安井さん！なんか重要なことを言った気がするんですけど！」
伊織「深夜でレギュラーになるかもなんて重要な話をさらっとするんじゃないわよ！」

響「レギュラーって言うのは、あれか？芸人か？」

真「大変だ、響が混乱している！」

貴音「放っておきましょう」

千早「それで、いつ決まるんですか？」

安井「一週間後の放送の評判を見て、一ヶ月以内に決めるそうだ」
律子「視聴率によって、今後が決まるんですね」

大平「いいのか？もうレギュラー化は決まってるって言わなくて」

安井「今から緊張させてどうするんだよ。前日に伝えるから」

大平「しかし、よく橘を論破したな。大変だっただろ」

安井「パワ堂のプリン20個で落ちたぞ」

大平「まさかの物釣りかよ！」

そんなことも露知らず、765+876のアイドル18人は一週間後の放送が成功するのを緊張しつつ願うのだった。

第六話「昔は名作続き、最近は迷作続き」（後書き）

おまけのメイン以外の登場キャラ紹介

橘みずき

知っている人は知っている某野球ゲームの人物。女性二人目の投手で後輩は女性初の捕手。

今では球界を支える左腕。安井には高校時代に県大会でボコボコにされた思い出がある。

その後大学でたまたま一緒になった。大学時代は安井、大平とともに野球部を支えていた。

ちゃっかり物でお調子者。意外とだまされやすく、物につられやすい。

実家は高校を経営する富豪。

くしもとまさとし
串本真寿

元外海ケーブルテレビのディレクターで今は765プロ所属のような状態のフリーのディレクター。

高校時代、安井や大平とともに不良グループの一員として活動していたが、そのときのマスコミの歪んだ報道に怒りを覚え、「俺が報道を替える」と言う決意の元、大手テレビ局に履歴書を送ったがことごとく不合格。地元の外海ケーブルでようやく採用された。

単純な性格。目指すは「水曜どうでしょう」の嬉野D。

第七話「昨日の敵は今日の友って言葉が」

2010年5月某日。

765プロ+876プロの18人はTVの前に集まっていた。

真美「兄ちゃん、早く早く！始まっちゃうよ！」

春香「ちょ、美希邪魔！TVが見えない！」

律子「亜美、TVから離れて！目が悪くなるわよ！」

真「あ、始まった！」

春香「・・・あれ！？何で私が転んだやつを流してるんですか!？」

安井「全国放送版の特典だ」

律子「もう少しいい特典はなかったんですか？」

安井「小山が作ったTシャツのプレゼントならあるぞ？」

律子「あれをほしがる人なんているんですか？」

安井「まあ、挑戦だからな。30枚作ったけど10枚売ればい
ほうだし」

大平「小山はショック受けそうだけどな。せつかく作ったのに、
つて」

夢子「無事放送が終わったわね」

響「ライブもノーカットで放送なんていい会社だな！」

大平「安井の要求どおり編集やカットはなかったな」

律子「次回も、と言われると向こうは困りそうですけどね」

大平「よかったな、安井・・・安井？」

安井「・・・まるで仲のいいアイドル同士がじゃあってるみたい
だな」

「どげんかせんといかん、ってやつだな」

安井「誰かいライバル関係のアイドルとかいないか？」

美希「あ、いるよ」

安井「ちょっと詳しく聞かせてもらえないか？」

美希「えーつとね・・・」

海に見える散歩道。

？「リーダー、仕事ないね・・・」

？「ほんとはみんなこうなんだよ、我慢しろ」

？「今はただ、天啓を待つだけよ」

以前、美希を始めとして数人はとあるアイドルユニットと競っていた。

その名は魔王エンジェル。あらゆる手口を使って仕事を取っていた東豪寺プロのアイドルだった・・・はず。

作者は漫画の表紙しか見たことがないので詳細は一切分からないが、一応ストーリーはあれの完結後と言う感じにしてある。

とにかく美希たちとの戦い（があったのだろうか）の後、魔王エンジェルの三人はかつて捨てたアイドルとしての正しさ（要するに卑怯なことをせず正々堂々と仕事を取ることを）を取り戻した。今は東豪寺プロを離れ、フリーとして活動しているが、かつての卑怯な手口が明るみに出た上、フリーとなっては仕事は皆無に近かった。

「あー、深夜番組でいいから仕事来ねえかなあ」

こう言ったのは東豪寺麗華。魔王エンジェルのリーダーだ。

ちなみに東豪寺プロは彼女の父親（だったはず）が作ったプロダ

クシヨンである（多分）。

「深夜番組なんてアニメとか売れない芸人のやつとかしかやってないんじゃない？」

そう言ったのは朝比奈りん。魔王エンジェルのツイントールのほうである。

「そうやって差別するから仕事がないのよ」

こちらは三条ともみ。魔王エンジェルのショートカットの方である。

りん「なんかこうしてると、幸福エンジェルの頃を思い出すよね」

麗華「そうだなあ……。あの頃はすべての仕事に全力を注いでいたなあ……」

ともみ「仕事が決まったら大喜びして、仕事がなくなったら大泣きしてたわね……」

りん「今考えたら、あの頃のほうが仕事あったよね？今より」

麗・と「……」

りん「……」

麗華「あーあ、こういうとき近くにたまたま番組のプロデューサーがいるとかっていうことねえのかなあ……」

ともみ「さすがにそんな拾った宝くじが当たるようなことはないと思うけど？」

りん「あーあ。寒くなってきたしそろそろ帰る？」

麗華「今日もカップ麺か……。さすがに飽きたよなあ」

そういつて借りているアパートのある方向へ歩き出したときだった。

ドンッ！

麗華「いてっ！」

？「おっと、すまねえ」

麗華「おい、人にぶつかつていてそんだけか？」

？「ああ、悪い。どうもすいませんでした」

そういうと男は深々と頭を下げた。

？「そうだ、ちようどいい。今人を探してるんだが、家に行ってもいなかったんだ。なんか知らないか？」

りん「誰か探してるの？」

？「ああ、ちよつとな。大切な用があつて」

ともみ「ひよつとしたら名前を聞いたら分かるかもしれせん。名前を教えてくださいますか？」

？「ああ、えーつとな」

？「魔王エンジェルって言うんだが」

麗華「・・・え？」

りん「今の・・・聞き間違いじゃないよね？」

ともみ「えーつと、あの・・・」

？「お、何か知ってるのか？」

麗華「俺・・・私たちがそうですが？」

？「・・・」

？「コングラッチュレーション！おめでとう！」

りん「え、なに！？」

？「実はうちの番組に出てほしくてな。もしよかったら一週間後にこの住所の場所に来てくれないか？」

ともみ「ど、どういうことですか？」

？「俺は番組のプロデューサーなんだが、番組のてこ入れとして新レギュラーを探してたんだ。もしよかったら来ないか？」

麗華「是非行かせてもらいます！」

？「OK。じゃあそのときはキャラは作らずに素で来てくれ」

麗華「!？」

ともみ（リーダーのキャラ作りを一瞬で見破った・・・！まあ、一瞬『俺』って言っちゃったからね）

？「じゃあ、その時に。楽しみにしてるよ」

ともみ「あ、あの、名前を教えてくださいませんか？」

？「ん？名前？」

「安井、安井持和だ。じゃあ、よろしく」

麗華「・・・おい。とんでもないやつに会ったぞ」

りん「安井って人って確か、ケーブルテレビで視聴率を80%超える番組作ってたって話題の人だね？」

ともみ「これまでのアイドルの枠を破る、って言った人だったかしら。そんな人に会うなんて・・・。なんか無礼なこととか言っていないですよね？」

麗華「あ、ぶつかったときにいちゃもんつけて謝らせたな・・・」

ともみ「リーダー。さすがの私も怒りますよ？」

麗華「しょ、しょうがねえだろ！そのときはまだそんな人だなんて

知らなかったんだから！」

りん「二人とも落ち着いて！とにかく、一週間後に備えないと！」

麗華「キャラ作りすんなって……。キャラなんて作ってねえぞ？」

ともみ「ごめんリーダー、聞こえなかった」

麗華「・・・お前最近、私に厳しいよな？」

りん「ふ、二人とも落ち着いて！」

安井「なるほど、美希と千早に聞いた通りいいキャラだ。俺っ子に小悪魔、そしてクールなんてな」

「よし、美希と千早にお礼として、好きなもん買ってやるか」

第八話「切磋琢磨、そして団結」

ともみ「リーダー、起きて！時間に間に合いませんよ！」

麗華「・・・あー？今日何かあったわけ・・・？」

りん「一週間前安井って人が言ってたじゃん！うちの番組に出ないかって！」

麗華「・・・」

麗華「そうだった！！」

麗華「おい、今何時だ！？」

ともみ「リーダーの寝起きが悪いのは知っているので3時間前に起こしたから大丈夫です」

麗華「何だ、じゃあもう五分・・・」

ともみ「だーめーでーすー！！」

りん「こんなんで大丈夫かな・・・」

麗華「えーと、この上か？」

ともみ「看板に『下原採石場』って書いてありますけど・・・本当にここですか？」

りん「なんか怪しいね。騙されてるんじゃない？」

麗華「まあ、それっぽい雰囲気もあったが・・・。とりあえず行ってみるか」

りん「あ、なんかやってる」

ともみ「あれは・・・セットじゃないですか？」

安井「お、来たな。いった通り衣装も持ってきたな？」

麗華「持ってきたけど・・・。いきなり歌うのか？」

安井「ノー、サー。最後の大トリだ」

りん「えっ!?! いきなり!?!」

安井「大丈夫、金とコネで通してきたお前らだったらできるって」

麗華「・・・そのことにはもう・・・」

安井「おっと、すまない。ネットで調べたらえらく叩かれてたものでな」

大平「お、来たか! うん、なかなかよさそうじゃないか」

串本D「本当だな。やっさん、美希と千早に聞いてよかったじゃないか」

麗華「・・・えっ?」

安井「実はうちの番組にてこ入れするためいいやつはいないかと聞いたら美希と千早からお前らの話が出てな。ライバルとして切磋琢磨したが今は噂を聞かないと心配してたんだ」

西村D「安井! 言ってたやつ来たか?」

安井「おいヒゲ、お前はいつも1テンポずれてんだよ。うすうす分かるだろ、目の前のやつがそうだって」

小山S「そうですよ、どう見てもこの三人じゃないですか」

安井「衣装は黙ってる」

小山S「スタイリストだから黙ってるっておかしいでしょ!」

安井「とりあえずこいつの用意した衣装着て待っててくれ。ほかのアイドルの到着待ちだ」

伊織「あら、おはよう。あんたにしては珍しいわね、こんなに早く来るなんて」

安井「ああ、ちょっといろいろ用意があつてな。お前へのサプライズとか」

伊織「え?」

安井「小山のほう見てみる」

伊織「・・・麗華!？」

麗華「い、伊織!？まさかこの番組って・・・」

安井「イエス、サー。765&876によるあの『アイマスTV』だ」

麗華「い、いいのか、そんな番組に出て・・・？」

安井「フリーのアイドルには事務所なんて関係ないだろ？」

麗華「・・・確かに。じゃあ、伊織を喰っちゃってもいいんだな？」

伊織「あら、できるものなら見せてもらいたいわね」

安井「うんうん、それでいい」

伊織「ところで今日の企画は何かしら？」

安井「あれだ、○×クイズだ」

伊織「・・・また？また泥だらけになる危険があるの？」

麗華「またって・・・。前にもやったのか？」

伊織「ええ、やったわ。あの視聴率八割取ったときに」

麗華「あのときにやったのかよ・・・」

千早「おはようございます、安井さん。・・・あら？」

安井「おっす、千早。誰かは分かるよな？」

千早「ええ。・・・ひょっとして新しいレギュラーって言うのは？」

安井「イエッサー。こいつらだ」

麗華「えっ、レギュラー!？そこまで聞いてねえぞ!？」

安井「まず言ってるいな。だが一回きりのゲストとしてなんて呼ぶ気はなかった。もともとそのつもりだったぞ」

りん「・・・なんかいつのまにかすごいことになってる・・・？」

ともみ「リーダー、話を読めないので要約してお願いします」

麗華「よ、要するにあれだ、ゲストだと思って来たらレギュラーだった、ってことだ」

ともみ「・・・まったく要してないんですけど」

麗華「・・・俺、何かお前に怒られるようなことやったか？」

りん「ふ、二人とも落ち着いて！」

安井「・・・いいキャラだ」

伊織「あの頃はあんな風じゃなかったのに。だいぶ丸くなったわね」

安井「よし、全員来たな。ここで一つ皆に謝らなければならないことがある」

春香「いろいろありすぎてどのことか分からないですけど」

安井「実は一つずっと隠してたことがあるんだ」

伊織「隠し事しかないんじゃない？」

安井「こないだ視聴率によってレギュラーが決まると言ったな？」

律子「そう言えば言ってたわね。結局どうだったのかしら？」

貴音「深夜なりに視聴率は取れたと聞きました。二桁行ってないらしいですが・・・」

春香「ふええ、二桁行っていないならレギュラーは絶望的かなあ・・・」

愛「春香さん、大丈夫です！また次のチャンスへ向けて突っ走るだけですよ！」

安井「うん、まあそのことなんだが」

「実はレギュラー化は決まっていたな」

春香「・・・え？」

千早「・・・どういことですか？」

安井「そういうことだ。元から橘とのあいだで上手く話をつけてな、視聴率関係なくレギュラー化することになってたんだ。ただそのことを言ったらパニックになるんじゃないかと言うことで今まで黙っていた」

真「た、大変だ！ど、ど、ど、どうしよう雪歩！？」

雪歩「ま、真ちゃん、おちおちいつついて！」

響「雪歩がまず落ち着け！とにかく、レギュラー化ってことだな！」

愛「ばんざーい！ばんざーい！ほら、涼さんも絵理さんも！彩音さんも夢子さんも！」

涼「ば、ばんざーい！」

絵理「・・・ばんざーい？」

彩音「ばんざーい・・・なんか新手の宗教みたいデスネ」

夢子「・・・なんか馬鹿が集まってるみたいね」

愛「ほらほら、夢子さんも！」

夢子「え？」

愛「一緒にやりましょう！ばんざーい！ばんざーい！」

涼「夢子ちゃん、やろうよ！」

夢子「・・・ば、ばんざーい・・・」

愛「ほら、もっと元気よく！ばんざーい！ばんざーい！」

夢子「ば、ばんざーい！」

貴音「夢子殿もだいぶ馴染んできましたね」

律子「馴染んだっていうか飲み込まれてるけどね。ところで安井さん、レギュラー化の話だけですか？」

安井「あと、レギュラー化は俺たちだけじゃない。もう三人レギュラーが増える」

大平「じゃあ自己紹介してもらおうか。おーい！」

麗華「えーと・・・みんなのアイドル、東豪寺麗華ちゃんです！今日もみんなの心、ジェノサイドしちゃうぞ！」

安井「ドスッ（ボディブロー）」

麗華「ぐふっ！？」

り・と「リ、リーダー!!」

安井「キャラは作るなど言ったはずだ」

麗華「と、東豪寺麗華です……。す、すぐにお前らよりも上に行
ってやるからな……。」

律子「地面にひざまづいた状態で言われても悔しくないわね」

りん「え、えーと、朝比奈りんです! みんなに追いつけるように頑
張ります!」

安井「いたって普通の挨拶だな」

ともみ「三条ともみです。昔のことは忘れて、仲良くしましょう」

安井「と言っている。さあ、ジャッジメントタイムだ。嫌なら嫌と
言った方がいい。どうする?」

アイドル達「魔王エンジェルの皆さん……」

「ようこそ765プロへ!」

安井「よし、決まった。フリー時代のつらい生活からはこれで卒業
だな」

麗華「……。いいのか、本当に……。俺たちは汚い手を使ってお
前らを貶めようとしたんだぞ?」

春香「そんなのもう昔の話じゃないですか。昔は昔、今は今ですよ
!」

安井「アイマス2より強い『団結』見せようじゃねえか」

大平「もう許してやれよ・・・」

安井「あとは誰かが『仲間だもんげ』って言うだけだな」

大平「もう許してやれよ」

麗華「ぐすっ・・・本当に馬鹿だな・・・。所詮踏み台としてしか使わねえのに・・・」

伊織「泣きながらそんなこと言っても説得力無いわよ？」

麗華「うるせえ！まず、お前を踏み台に飛躍してやる！」

伊織「はいはい、逆に踏み台にされないように気をつけなさいよ？」

やよい「うっうー！りんさん、私と髪型が一緒ですね！」

りん「あ、そうだね！じゃあ、私と高槻ちゃんはライバルかな？」

やよい「うっうー！そうになったら、絶対に負けませんよ！」

りん「私だって負けないよ！765プロのツインテールは私のものだ！」

ともみ「あー、リーダーとりんはすぐに馴染めていいわね」

律子「あなたも飛び込んでいけばいいのに。うちのプロダクションは超オープンだからすぐに仲良くなるわよ？」

ともみ「あまり人付き合いは得意じゃないんで・・・」

真「ほら、ともみもこっち来なよ！」

亜美「ともみっちもみんなと話そうよ！」

真美「ほら、ともみっち早くー」

響「ほら、真と亜美真美が呼んでるぞ！早く行かないとな！」

ともみ「えっ、でも・・・」

響「いいから、いいから！」

律子「行ってきたさいよ？せっかく呼んでるんだから」

ともみ「・・・はい！」

安井「さて、馬鹿騒ぎがある程度終わったら収録始めるぞ。泥のほ

うに飛び込んだら春香みたいにならないようにな」
春香「人の古傷えぐらないでくださいよ・・・」

（収録中）

安井「近藤勇の偽名は大久保大和である。○か×か？」

りん「すごい！まったくピンとこない！」

麗華「勘で行け！勘で！」

ともみ「誰か一人飛び込んでおいたほうがいいしね？」

りん「なにその私が飛び込まないといけないみたいない感じ！？えー
い、×だー！！！」

バリン！

バシャーン！

りん「ぎゃー！」

春香「うわあ、顔からいった・・・」

伊織「春香にはできない業ね」

春香「できるわっ！」

安井「お疲れ、みんなでメシ行くぞメシ」
りん「え、私たちも？」

大平「当たり前だろ、仲間じゃないか」

安井「そこは『仲間だもんげ』だろ、jk」

大平「もう（ry」

彩音「あるいは『仲間じゃないイカ？』デスヨネ」

絵理「・・・イカ娘よりやっぱりだもんげのほうが・・・」

玲子「お前らは何を言っているんだ」

彩音「うわあっ、ロン毛、いつの間に！？」

玲子「絵理に変な知恵を入れないように私が見張っていたのよ！」

絵理「・・・でもこういうのがたまにあったほうが気兼ねなく話せる？」

玲子「・・・アレー？」

彩音「天然KY乙デス」

「焼肉店にて」

りん「リーダー、肉だ！肉がいっぱい！」

麗華「落ち着け！」

やよい「お肉、お肉。うっう」

安井「どうだ、よかっただろ？」

大平「あんなにすんなり受け入れられるとはな。ところで・・・」

安井「なんだ？」

大平「問題のレベル上げてんじゃねえよ！三蹟って何だよ！知ってるはず無いだろ！」

安井「三蹟と三筆ぐらい覚えとけ、脳筋馬鹿野郎」

大平「金髪豚野郎みたいに言うな！って言うか前よりひどくなってるじゃねえか！」

魔王エンジェルの三人も入ったことだし、ここでおさらいでもするか。

- ・アイドルは仕事を選ばず拒まず笑顔で元気に
- ・パイプは何も流さなければただの筒、何か流せば長く使える
- ・昔の因縁は今は思い出、再利用可能
- ・ライバル関係は友情と同一

さて、アイドル達は今日の収録は2回目の放送とは気づいていない。深夜の利点を生かした初回放送は一週間後だ。

はてさて、どうなることやら・・・ww

(2010年6月、安井の日記より)

第八話「切磋琢磨、そして団結」(後書き)

おそらく今回限りのキャラ紹介
にしむらけんいち

西村健一

ほぼ765プロ所属のフリーのカメラ担当ディレクター。

もともと串本と一緒に外海CTにいたが安井に引き抜かれた。

もちろん目指すは「水曜どうでしょう」の藤村P。

安井からは「ヒゲ」「メガネ」と呼ばれる。

こやまあきみち

小山明倫

スタイリスト。ということになっているが実際は単にスタイリストを買って出ているだけ。

服飾の専門学校卒という理由でスタイリスト扱いに。絵が上手い。白Tシャツに絵を描いて衣装にしてしまう。要するにけいおん! 4巻の最後の学祭でさわちゃんが作ったようなTシャツを毎回作っている。ちなみに先日の2時間スペシャルのプレゼントTシャツはすべて売れた。今はそれが誇り。

第九話「歴史は繰り返す、かもしれない」

シティホテル。765&876にとってはもはやお得意様となったホテルだ。

その廊下に怪しい影が5，6つ。

安井「よし、準備はOKだな」

大平「本当にやる気か？」

串本D「こいつの性格知ってるだろ、一ちゃん。やると思ったらやるやつだぜ」

西村D「こちらは何も知らない体で行きますよ」

アイマスTVレギュラー第一回の収録が今始まろうとしていた。

安井「にしても、このホテルの人間は優しいな。部屋を汚してもいいって言ってくれるんだから」

大平「美希がインタビューでこのホテルをよく使ってるって言うってからホテルの売り上げが激増したらしいな。アイドルに会えるかもっていう欲望メインだろうけど」

安井「さあ、世間話は終わりだ。あれ、用意しろ」

大平「マジでやるのか・・・。どうなっても知らないからな」

そう言っただ平が持ってきたのはもはやバラエティではおなじみのパイだった。

安井「これって思ったより美味くないよな」

大平「そりゃ食用じゃなくてぶつける用だからな」

安井「おい、パイ食わねえか」

大平「どこのシェフ大泉だよ」

501号室。「普通そうで普通じゃない少し普通なアイドル」（安

井談）、天海春香の部屋だ。

安井「おはようございます」

大平「なぜ寝起きドツキリ風だ」

早速部屋の中を物色。

安井「特に面白そうなものは何もないな」

大平「もし春香が起きたら、どこからどう見ても泥棒だよな」

安井「よし、物色終わり。あれ持って来い」

大平「パイって言っちゃまえよ」

安井「子供たちもおいでえ」

大平「どうでしょうネタはもういいよ」

椅子の上に安井。

その椅子を支える大平。

安井「お前の顔に飛ぶかもしれないから、伏せとけよ」

大平「分かった。じゃあカウントダウンだ」

安・大「5・4・3・2・1・・・」

「0！」

0と同時に安井の手から滑り落ちるパイ。

パイはそのまま落下し春香の顔面へ向かっていった。

べしゃっ。

春香「!?!」

安井「おはようございまーす」

春香「おはようじゃないでしょ!何ですかこれ!」

安井「第一回の収録だよ」

春香「え?第一回って・・・」

安井「レギュラー第一回の収録だよ」

春香「ええええええ!?!」

春香「また寝起きドッキリか！第一回からこれって無茶でしょ！」

安井「じゃ、おやすみ」

春香「そしてまたこのパターンか！」

大平「さすが、春香は順応が早いな」

安井「さあ、決断だ。君はこのままついてきてもいいし、ベッドに戻って寝てもいい。どうする？」

春香「どっかのゲームみたいな台詞ですね……。一応ついていきますけど」

はるかがなまになった！

次は隣の「実写版ボーカロイド」（安井談）、如月千早の部屋だ。ガチャッ。

千早「あら？安井さんに大平さん、春香まで……」

安井「……」

大平「……」

春香「……」

安井「撒収」

春香「お疲れ様でしたー」

ここで千早が事の重大さに気づく。

千早「すいません、安井さん！もう一度やらせてください！」

安井「二度目はたいてい受けないからなあ……」

千早「もしこのまま終わったら一生後悔しそうです！」

大平「じゃあ、もう少ししたらもう一回やるから……」

数分後。

千早「や、安井さん！？なんですかこれ！？」

安井「レギュラー第一回の収録だよ」

春香「ほら千早ちゃん、カメラカメラ」

千早「……（深呼吸）。おはようございます、安井さん」

安井「編集点を作るなって」

大平「とにかく成功だな！」
春香「そうですね！」

安井「・・・」

大平「・・・」

春香「・・・」

千早「・・・」

安井「・・・これは没だな」

大平「最悪千早がいなかったことに・・・」

千早「それはやめてください！最初のいいから流してください！」
串本D「そっちも含めて没に・・・」

千早「やめてー！！」

千早がどうなるかはともかく、次は「もやしと元気の集合体」（もちろん安井談）、高槻やよいの部屋だ。

安井「起きてないよな・・・」

春香「さすがにやよいちゃんは寝てるでしょう・・・」

部屋の中を物色する。

安井「もやしの袋とか落ちてないか？」

大平「何で部屋の中でもやし食ってんだよ・・・」

やよい「ひゃあああ!？」

安井「おはようございまーす」

やよい「おはようございます・・・。なんですかこれ？」

安井「パイだよ」

やよい「食べられますか？」

安井「一応」

やよい「うっうー・・・。あんまりおいしくないです」

安井「食用じゃないからな」

やよい「じゃなくて！この状況は何ですかってことです！」

安井「レギュラー初回の収録だよ」

やよい「え！？あれじゃないんですか！？」

安井「あれとか言うな！事前にロケやったのがばれるだろ！」

大平「お前がばらしてんじゃないか！」

次は「光り輝く（デコ的な意味で）お嬢様」（無論安井談）、水瀬伊織の部屋だ。

安井「起きてんじゃないぞ・・・」

千早「伊織は早く寝てそうな気がしますがね・・・」
そして部屋の中を物色。

安井「なんか化粧品ばかりだな」

春香「ただ、どの化粧品も高級そうですよ・・・」

やよい「いいなー伊織ちゃん、こんなの使えて・・・」

安井「よし、恨みと憤りもこめてやよいが落とせ」

やよい「えっ！？は、はい、やってみます！」

大平「やらせるなよ・・・」

伊織「きゃああああ！？何よこれ！」

やよい「伊織ちゃん、おはよう！」

伊織「その声はやよい！？ど、どこにいるの？」

安井「隣だよ、隣」

伊織「その声は安井プロデューサー！またあんたの仕業ね！！」

安井「計画は俺だが実行はやよいだ」

伊織「え？・・・ほんとに？」

安井「Yes, We Can」

大平「お前はオバマか」

(中略)

安井「さあ、ここから未開拓ゾーンだ。魔王エンジェルの部屋に突撃だ」

春香「なんか楽しみなような怖いような・・・」

安井「春香くん、たなびたいことがあるんDA☆」

春香「某キチガイアニメの真似はやめてください！で、なんですか？」

安井「一度でいいから特攻隊長として部屋の中を見てきてくれないか？」

春香「ことわる！」

安井「そ、そんなあ・・・。一度ぐらいいいじゃないか・・・」

大平「安井よ、絵理と彩音が笑い転げてるからその辺にしとけ」

安井「と言うわけで、頼んだぞ春香」

春香「はいはい、分かりましたよ・・・」

カチャリ。

春香「麗華さんは寝てるみたいですわね・・・」

安井「てつきり夜遅くまで起きてるもんだと思ったが、ちよつと拍子抜けだな」

物色開始。

安井「なんもねえなあ・・・」

春香「最近まで食事すらままならなかったらしいですからねえ・・・」

安井「よし、準備だ。大平、パイ持って来い」

ヒュー・・・ベシヤッ。

麗華「うわあっ！？誰だ、こんなことしやがったのは！！」

安井「おー、素が出た」

麗華「・・・その声は安井さんか？とりあえず今俺はどうなってるんだ？」

安井「一、顔面にパイをぶつけられている。二、それを皆が見ている。三、これはレギュラー初回の収録である」

麗華「あー、なるほ・・・！？ちよつとまで！これが初回の放送だよ！？どんな公開処刑だよ！」

絵理「麗華さん、アイマスTVでは常識に囚われてはいけない・・・」

彩音「すべての常識は安井さんによって破壊される・・・！」

麗華「洗脳されてんじゃねーよ！」

響「でも、なんかつまらないなー。麗華だったらてつきり夜更かししてるもんだと思ったのに・・・」

麗華「俺にどういう期待をしてるんだよ」

安井「さあ、次だ次。麗華の分までサプライズしてくれるはずだ」

春香「ここがりんさんの部屋ですね。じゃあ、行ってきます！」
カチャ。

春香「・・・あれ？」

千早「どうしたの、春香？」

春香「・・・りんさん、いませんよ？」

大平「えっ!？」

りんの部屋の中は無人だった。

鞆は置いてあるが本人はいない。

荒らされた形跡はなく、窓が開いている。

これらから推測されるのはひとつ。

春香「・・・誘拐!？」

千早「でももしそうだとっても・・・いったい誰が？」

安井「以前東豪寺プロにいたときにあらゆる手を使っていたんだ。

それで恨まれている可能性もあるだろう？」

春香「・・・ということは、魔王エンジェルに邪魔された元アイドルが・・・!？」

安井「無きにしも非ずだ。とりあえずともみに報告だ」

ともみの部屋の前に全員が集合する。

そして、春香がマスターキーで鍵を開ける。

ガチャッ！

春香「大変です、ともみさん！りんさんが・・・」

りん「ん？どうしたのみんな？」

春香を始め全員「ズコー」

安井「まあ、うすうすそうだろうと思ってたけどな」

春香「りんさんの部屋のテーブルに『ともみの部屋に行ってるよー

♪』っていうメモもありましたしね・・・」

千早「・・・私たちが部屋に入れなかったのはそのネタのためですか」

安井「ていうか、お前らは寝ろよ。モンハンばかりやってないでりん「だってボス戦だしー」

ともみ「私は寝たいんですけど、りんが手伝えって・・・」

安井「とりあえず、そいつ倒したらさっさと部屋帰って寝ろよ」

安井「と言うわけで、これからこの時間帯に売れないアイドルたちの茶番劇をお見せしたいと思います」

春香「ひどっ!!」

千早「売れないアイドルって!!」

伊織「茶番劇って!!」

安井「ではまた来週ー」

串本D「おつかれー。っていうか、全部流すのか？」

安井「千早のミスから、起きない美希も、モンハン中のりんとともみも、その前のミニコントもすべて流す予定だ」

美希「あふう」

安井「明日は普通に収録があるから。今から寝ておけ」

春香「朝2時まで収録のあとにスタジオ収録はきついなあ・・・」

安井「大丈夫、スタジオじゃなくていつもの採石場だ。時間も遅いからゆっくり寝れるぞ」

大平「明日14時に採石場集合な。五分前行動を心がけろよ」

そして全員が部屋に戻ったあと。

安井と大平はテレビ電話で高木社長と話していた。

安井「こっちは大丈夫だ、おっさん。後はそっちの都合だ」

高木「こちらでも大丈夫だ。三国君は私達が大丈夫ならすぐにでも向かわせると言っていた」

大平「分かりました。では三国社長に明日14時に下原採石場集合と伝えておいてください」

安井「高木のおっさんの友人もプロダクションの社長とはな。しかもうちより経営がやばいという」

大平「まあ、名前を聞いて『その名前はねーよ・・・』と思っただけだからなあ・・・」

安井「まあ、392プロダクションの今後は俺たちにかかっているわけだ」

第九話「歴史は繰り返す、かもしれない」(後書き)

誰得のおまけ

安井がアイドルたちにつけたキャッチフレーズ集

春香…普通そうで普通じゃない少し普通なアイドル

千早…実写版ボーカロイド

やよい…もやしと元気の集合体

伊織…光り輝く(デコ的な意味で)お嬢様

あずさ…要同伴者のどたプリンセス

真…王子様になった王女様

雪歩…穴掘り詩人

律子…事務所を支えるメガネエビフライ

亜美…双子の片方

真美…双子のもう片方

美希…おにぎり好きの年中眠り姫

響…琉球育ちの女バカボン

貴音…面妖な天体観測アイドル

愛…現代版神風特攻隊

涼…女装からイケメンまで

絵理…リアルを駆けるネットアイドルパート1

彩音…リアルを駆けるネットアイドルパート2

夢子…夢を飛び交うレッドバタフライ

麗華…豪腕ジェノサイドアイドル

りん…無邪気な小悪魔

ともみ…碧髪のクールビューティー

第十話「差し出した手は救いか否か」

三国幸一郎。

かつて芸能界で若くしてSランクアイドルとなり一世を風靡した彼は結婚して引退。

だが、後にくるアイドルを育成するため、とあるプロダクションでプロデューサーとして働き始めた。

そこで彼が見たのは、自分のころと違うアイドルの姿。

仕事の直前までだるい、面倒くさいなどと言い本番になると愛想を振りまき、戻ってくればまた文句を言う。

プロデューサーはそんなアイドルの機嫌を損ねないように徹底的に太鼓を持つ。

かたやプロダクションの社長は難しい仕事や体を張るような仕事は一方的に断り、楽な仕事ばかりをアイドルに渡す。

―これが俺の後のアイドルたちなのか。―

彼の受けた衝撃は計り知れないものだった。

失意のうちにプロダクションを辞めた彼は今の芸能界を憂い、酒に溺れるようになった。

そんな彼を救ったのはプロダクションを設立した直後の私、高木順一朗だ。

私もまた、彼と同じ衝撃を味わったが、同時にある思いが浮かんた。―ならば私は、『本当のアイドル』を育てる事務所を作ろう。

そして私が最初に引き入れたのが三国くんだった。

廃人寸前の彼をプロデューサーの一人として招き入れた。

そこで彼は、自分ともに切磋琢磨する『昔のままのアイドル』の姿を目にする。

―そう、これだ。俺はこんなアイドルを探していたんだ。―
春香くん達より10年ほど前のアイドルたち。

彼のように有名になることはできなかったが、三国くんがプロデューサーしたアイドルたちは皆アイドルになってよかったと語ったと言う。

そして5年前、三国くんは更に勉強して、私の様になると言い海外へ行った。

・・・それで去年帰国して、自らのプロダクションを立ち上げた。
名前はこのプロダクションのようにもじって『392プロダクション』。

そして今年、ついに最初のアイドルユニットをデビューさせた。・・・
のだが。

彼はアイドル時代からネーミングセンスが少しおかしくてね。
そのアイドルたちに芸能界では好かれなさそうな名前をつけてしまったんだよ。

だから、安井君と太平君にどうにかしてもらえないかと思ってね。
・・・え？名前は何かって？

・・・『雪月花』と言うんだ。

その三人はとある川岸に腰を下ろしていた。

？「彩夏さん、今日も仕事見つかりませんでしたね・・・」

？「何かにつけて、名前が悪い、名前が悪い・・・。いつまで引きずってるのかしら？」

？「言秋さん、これも人生です。いい目が出るまで待ちましょう」

雪月花。

かつて『幸福エンジェル』時代の魔王エンジェルから仕事を奪い、その復讐によって芸能界から追放されたアイドルユニットだ。

その名前をつけられた三人。

手っ取り早く髪型で紹介する。

リーダーで茶髪、ツインテールの言秋彩夏。

最年長でロングの黒髪の小野寺明菜。

最年少で明るい茶髪のおさげっ子、沢井小花。

この三人がいれば新生『雪月花』のメンバーだった。

三国社長は高木社長のよう、アイドルたちに挫折や苦汁を味わわせながら成長させようとしていた。

そこで雪月花の名前を使い、茨の道を歩ませることにしたのだ。

だが、雪月花の名前は芸能界ではタブーとされていた。

ゆえに使うとするテレビ局はなく挙句の果てに三国社長自身にも好からぬ噂が立ち始めていた。

三国社長は高木社長に助けを求め、高木社長は安井と大平に助けを求めた。

安井「話がなげーよ、おっさん。要するに誰からも嫌われてる名前ついちゃったアイドルをどうにかすればいいんだろ？」

大平「任せてください！そんな変な風評はどっかにぶっ飛ばしてやりますよ！」

安井「お前の口から風評なんて言葉が出てくるとは。明日は雪だな」
大平「どういうことだよ！」

場所は変わって先ほどの河原。

彩夏「でも、さすがでデビューして半年になるのにひとつも仕事がないのはどうかと思うでしょ？」

明菜「それは確かに・・・」

小花「思います・・・」

三人「はぁ・・・」

彩夏「こんなことなら家出してアイドルにならずに、父さんの言ったように弁護士になればよかったなあ・・・」

明菜「実家のおばあちゃんの元で、農作業の手伝いをしてあげばよかった・・・」

小花「お母さんたちの分まで私が稼ごうと思ったけど・・・私じゃ

無理なのかな・・・」

そのとき、彩夏の携帯が鳴った。

彩夏「あ、社長からだ・・・」

明菜「プロデュース中止とかかしら・・・」

小花「ええ・・・そんなあ・・・」

三国「もしもし、彩夏かい？今どこにいる？」

彩夏「事務所の近くの河原です」

三国「そうか、ちょうどよかった。伝えたいことがあるんだ、すぐ戻ってきてくれるかい？」

392プロ事務所。

三国「実はいい知らせがあるんだ。君たちはあの『アイドルマスターTV』に出られることになった」

彩夏「『アイドルマスターTV』・・・！？あの、ケーブルテレビ時代に視聴率80%を達成した！？」

明菜「社長、変な冗談はやめてください。私たち、まだ笑えますから」

三国「いや、ホントだよ。次回のゲストさ」

小花「や、やっと初めての番組に出れるんですね！感激ですー！！」

彩夏「騙されちゃ駄目よ、小花。これは社長の罠よ」

三国「そんな孔明の罠みたいに。嘘だと思えば、明日この場所に行ってみればいいよ」

明菜「・・・ここって採石場じゃ・・・」

三国「いいからいいから。騙されたと思って行ってみなっ」

翌日、三人は採石場の前にいた。

彩夏「本当に来ちゃったけど・・・なんかやってる？」

明菜「ここからじゃ分かりません。一応上がってみますか？」

小花「きっと本当ですよ！行ってみましょう！」

彩夏「あれ？なにかやってるわね」

明菜「あれ・・・セットじゃないですか？番組の」

小花「やったー！！やっぱり社長さんの言ってたことは本当だったんですね！！」

その声に気づいて、一人の男が近づいてきた。安井である。

安井「よう、来てくれたか。初めての番組らしいが、緊張せずに自由にやってくれていいからな」

彩夏「あの、本当に私達がゲストでいいんですか？私たち、知名度なんてないし、目立つところなんてないし・・・」

安井「ん？ああ、ひとつだけ間違いがあるな」

彩夏「やっぱり・・・」

安井「俺はゲストじゃなくてレギュラーで頼んだんだが」

彩夏「・・・え？」

明菜「・・・レギュラー？」

小花「れ、れぎゅー！？」

安井「Yes, I Do. レギュラーだ。宮古島で旅館やってる芸人とは違うぞ。番組にいつも出てるほうだ」

大平「おっ、来たな。揃いも揃って可愛いじゃないか」

安井「三人とも気をつけろよ。こいつはすぐにホイホイ声をかけるやつだからな」

大平「変なことを教えるんじゃないか！そう言うお前だって、小鳥さんにホイホイ声をかけてるじゃねえか」

安井「それがどうした」

大平「開き直りやがった・・・」

安井「まあ、お前がこいつらに手を出そうもんなら、彩夏の父親が黙ってないけどな」

彩夏「・・・父さんのことは・・・触れなくてももらえますか？」

安井「ああ、すまねえな。このアホにお前の父さんが有名な弁護士だってことを教えとかないといけないくてな。お前、言秋って言う弁護士知ってるだろ？その娘さんだよ」

大平「え、マジで？あの人の娘さん？」

安井「そうだ。だからお前がこいつらに手出したら、すぐに告訴されるぞ」

大平「手は出さないけど、何だそうだったのか。友人が傷害の容疑で起訴されたときは助けてもらったな」

串本D「はっくしょん！」

西村D「くっさん、風邪？」

串本「風邪か安井に変な噂流されてるかどっちかな」

安井「じゃあ、もう少しでうちのアイドルたちも来るから挨拶するように」

彩夏「は、はい」

ふと、安井は明菜の方を向いた。

安井「しんかしおめえ、今年は暑くなりそうだなあ。おめえんこの畑さ大丈夫か？」

明菜「大丈夫だあ、うちのばっちゃんと父ちゃんと母ちゃんが畑を毎

日手入れしてるべな・・・あっ!？」

彩夏「え?今の何？」

小花「なんか、昔おばあちゃんの家に言ったときのことを思い出しました・・・」

明菜「あ、いや・・・なんでもないですよ?」

安井「いいじゃねえか、方言と訛りだらけのアイドルだって。ほら、実家から送られてきたきゅうり、食べるか?」

明菜「いや、やめとくべ。でもやっぱきゅうりはこうやって曲がりくねってたほうが・・・ってやめてください!」

大平「遊ぶなよ・・・」

明菜「うう、アイドルの間はずっと標準語で通そうって思ってたのに・・・もうあいどるなんてやりたくねえ・・・」

大平「泣いちゃったじゃねえか」

安井「俺のせいじゃない」

彩夏「いや、どう考えても安井さんに非があると思うんですけど」

明菜を彩夏に任せて、安井は小花の方を向いた。

安井「とりあえず、今日の出会いの記念だ。受け取ってくれ」

小花「こ、これは焼肉店の割引券!?も、もらっちゃっていいんですか!？」

安井「ああ、とっというてくれ。お前からやよいと同じにおいがするんだ」

小花「やよいさん・・・そういえば765プロとかの番組ですよね!?!やよいさんに会えるんですね!?!」

安井「そのとおりだ。おさわりも自由だ」

小花「やったー!!」

大平「・・・やよいと同じにおいしくないな」

安井「事前情報だと小花は父親も死んでいないらしい。お前、そのことなじんなよ」

大平「それはお前だろ・・・」

いきなりいじられまくった雪月花。
他のアイドルたちとの絡みは次回。

第十話「差し出した手は救いか否か」(後書き)

キャラ紹介

三国幸一郎

元Sランクアイドルで392プロダクションの社長。

細かいことは最初のページで高木社長がしゃべったので省略。

アイドルでも呼び捨て。小鳥さんより2歳ほど年上。

ファッションセンスは抜群だが、ネーミングセンスはポンコツ。

飼っているインコの名前は「フェニックス」。

飼っている猫の名前は「アウグストウス」。どうしてそうなった。

雪月花

言秋彩夏
ことあきさいか

雪月花のリーダー。15歳。髪形は濃い茶色のツインテール。

父親は著名な弁護士で、母親は行政書士。兄も警察官とまさにエリート一家。

だが、父と同じ轍を踏みたくないアイドルになることを決意、伝えるが案の定猛反対され大喧嘩の末家を飛び出し765プロへ向かったが道に迷い、たまたま三国社長に助けられそのまま流れで392プロに入った。

とりあえずアイドルになれるならどこでもよかったらしい。父より有名になって父を見返そうと思っている。

アイドルを目指しているが、スポットライトを浴びるのは大の苦手。と言うのも、小学校のときの学芸会で主役を張ったにもかかわらず緊張で大失敗してしまい、心のない他の子供の母親たちから陰口を叩かれたことがあり、それ以降一人で何か目立つことをするのができなくなった。

きっちりした性格で曖昧なのは許せない。趣味はネットサーフィン。そして隠れオタク。

兄の名前は**ずばり敬司**。（けいじ）

他のアイドルは名前で呼ぶ。年上には「さん」、年下は呼び捨て。ただし明菜も呼び捨て。

小野寺明菜（おのでらあきな）

雪月花の主に左側。17歳。髪型は長い黒髪。メカクレではないが眉間を隠すように長く前髪が生えている。

実家はとある地方の大農家で、東京ドーム4、5個分の田んぼや同じくそれくらいの広さの畑、更に酪農にも手を伸ばし牧場を三つ所有している。つまり、伊織や麗華と同じお嬢様。

ただし、本人は祖母の家で母親や二人の兄とともに農作物の収穫や家畜の世話をして育ってきた。

ずいぶん土臭いお嬢様だな。（安井談）

アイドルになる気は毛頭なかったが、候補を探して各地を回っていた三国社長に見初められスカウトされる。

最初は拒否したが、祖母と両親、そして二人の兄に説得されてアイドルになることを決意する。

アイドルとして有名になり、家族を喜ばせて恩返しをするのが夢。

田舎出身の自分を恥ずかしく思い、普段は標準語で喋っているが、相手に方言や訛りを使われたり、感情が高ぶったりすると思わず方言や訛りが出てしまう。

おとなしく、いつも一歩下がって見ている。趣味は家庭菜園、耕作、草むしり。趣味・・・なのか？

百歳近い曾祖母もいる。兄の名前は**毅と健作**。（つよし けんさく）

他のアイドルは年上、年下にかかわらず苗字にさん付けで呼ぶ。

沢井小花（さわいこはな）

雪月花の主に右側。13歳。

いろいろやよいと似ている。まず髪型（やよいはツインテール、小花はおさげ・・・似てないかw）、髪の色（ほぼ一致）、そして家が貧乏で5人兄弟。ただし、やよいが長女だったのに対して小花は三女（姉二人、兄二人）。また、父親は幼い時に亡くなり母親が家計を支えている。とはいえ、母親だけの収入ではどうにもならず、四人の兄と姉は皆深夜まで働いている。小花自身も何とか家庭を安定させる手助けをしたいと思い392プロへ入る。

末っ子だったため甘やかされたが、本人はそれを嫌がり、やよいのような頼れる人になろうと思っている。

性格もやよいそっくり。元気で疑うことを知らない純粋な性格。勉強は苦手・・・のように見えて意外とできる。

趣味は料理と手芸。彩夏や明菜のためにポーチを編んだことも。

兄弟の名前は長男の潤一、長女の沙織、次女の宮子、次男の秀次。

他のアイドルは年上、年下にかかわらず名前にさん付けで呼ぶ。

第十一話「和解と言うべきなのか」

安井「じゃあ、もうすぐうちのしょぼいアイドルたちが来るから。一応挨拶しとけ」

大平「しょぼいとか言うな！お前のプロデューサーしているアイドルだろうが！」

安井「お前もプロデューサーだろ！それとも裏方にでも回るか？」

彩夏「まあまあ」

安井「ああ、すまねえ。新人のお前らに心配かけちゃいけないよな」
小花「どんな人たちに会えるのか、ときどきします！」

明菜「ふう……。私は、安井プロデューサーみたいにいじめられなければどんな人でもいいです」

大平「いきなり心に傷負わせてるじゃねーか」

安井「俺は悪くねえ」

彩夏「だから安井さんが悪いって何度も（ry）」

春香「おはようございまーす！」

安井「おはっす。今日もネタ要員としての活躍、期待してるぞ」

春香「いきなり、それはどうかと思います……。あれ、その子たち？」

安井「ほら、昨日話しただろ。392のアイドルユニットだよ」

春香「ああ、皆さんが！はじめまして、天海春香です！」

彩夏「雪月花のリーダー、言秋彩夏です」

明菜「小野寺明菜です」

小花「沢井小花です！」

春香「これからよろしくね！一緒にがんばりましょう！」

彩夏「あ、ほんとにレギュラーなんですね」

春香「昨日安井さんがそう言ってました。初めてのテレビ出演らし

いけど大丈夫！元氣に行けば何でもできる！」

安井「どこの某アントニオ猪木だ」

大平「某を無駄遣いすんな」

千早「おはようございます、安井さん、大平さん。あら、春香も」

春香「あ、千早ちゃん！ほら、昨日安井さんが言ってた雪月花の3人！」

千早「そう、あなたたちが……。これからよろしくね」

彩夏「よろしく願います」

千早「そう言えば沢井さんはやよいと同じような境遇らしいわね。やっぱり、家は大変なのかしら？」

小花「お兄ちゃんやお姉ちゃんが働いて支えています……。って、何で私の名前を知っているんですか？」

千早「昨日、安井さんが教えてくれたのよ。あと軽く特徴も」

小花「ということは、私の特徴は貧乏って感じですか？」

千早「そういう感じね。言秋さんは真面目で小野寺さんは農家って言うってたわね」

彩夏「間違っていないけど間違ってる気がします……」

伊織「おはよう、安井さん、大平さん。今日は春香も千早も早いからね」

春香「今日は新しい仲間に出会えるから早起しちゃったんだよね」

明菜「そうだったんですか！？ 私たちなんかのために大切な睡眠時間を削ってしまってすみません」

春香「いや、そんな謝られることでは……」

明菜「いえいえ、睡眠時間は重要です。農作業のためには十分な睡眠時間が必要なのです」

春香「私、農作業やらないんだけど……」

明菜「早く寝て早く起きないと作業が遅れるのです。牛や豚にもかわいそうですし」

春香「牛や豚・・・？明菜ちゃんの家ってどんな家？」

伊織「確か日本でも指折りの大農家よ。牧場も三つ所持してるんだっけ？」

明菜「はい、そうです。そう言えば、水瀬さんのお父さんにはこの前結構なお酒をいただきました。高かったでしょう」

伊織「あの程度、問題ないわよ。そう言うあんたの家だって、よくチーズとか牛乳とか送ってきてくれるわよね。チーズがワインに合うって父が喜んでたわよ」

明菜「光荣です」

春香「お金持ち同士の会話ってすごいなあ・・・」

その後も次々とアイドルたちが到着する。

そしていよいよ運命の時間が近づいてきた。

麗華「あー、ねみい・・・」

ともみ「リーダー、しっかりしてください」

りん「安井さん、おはようございまーす」

安井「おはっす。昨日言ったこと覚えてるか」

麗華「あー。なんか三国のなんちゃらって言ってたような・・・」

安井「392のアイドルユニットだよ。名前は『雪月花』だ」

一瞬、3人の動きが止まる。

無理もない。かつて自分たちを陥れた、思い出したくもない過去の敵と同じ名前なのだ。

安井「お前らがそう言う反応することは分かった。だが、言っておく。お前らが嫌っている雪月花と、この雪月花はまったくの別物だ。それでもだめなら、高木に言ってどうにかしてもらうさ。後はお前らの判断に任せる」

長い沈黙。

採石場全体に緊張感が張り詰めた。

そして、麗華がゆっくりと三人の前に行き一言。

「はじめまして。そして、よろしく」

緊張感に包まれていた採石場はあっという間に暖かい空気に包まれた。

他のアイドルやスタッフに広がる安堵と幸福の表情。

麗華「はじめまして、とは言ったけど明菜とは面識あるよな。ほら、以前どっかのお嬢様学校が社会科見学に来ただろ？あのときに俺もいたんだ」

明菜「ええ、覚えています。乳絞りや田植え体験で大騒ぎしてましたよね？」

麗華「そ、そうだった？覚えてねえなあ」

明菜「私は覚えていますよ。唯一馬から落ちて、強がっていた東豪寺麗華さんを」

麗華「ちよっ、お前！」

りん「そんなことあったんだw」

ともみ「リーダーってどこか抜けてますもんね」

麗華「うるせえ！」

安井「今日の企画は聞いてるよな？」

彩夏「壁に飛び込んで間違いだと泥だらけになる〇×クイズですよ？」

安井「ああ、だが今回は小野寺牧場の協力により間違えると牛乳まみれになる〇×クイズになった」

春香「どうしてそうなった！っていうか明菜ちゃんはそれでよかったの！？」

明菜「牛乳なんて有り余ってますから。それにこれは出荷できない不良品ですから」

亜美「うう、絶対飛び込みたくない」

真美「飛び込んだら、全身が牛乳雑巾みたいな臭いになっちゃうよ」

安井「天国か地獄か！間違えれば牛乳のプールへダイブ、おなじみ〇×クイズ！」

明菜「この牛乳は第二小野寺牧場の提供です」

伊織「ちゃっかりと宣伝するあたりに農家ゆえの食欲さを感じるわ」

安井「と言うわけで新メンバーも入った番組をそれなりによろしく願います」

大平「それなりじゃなくてきちんとよろしく願います」

安井「ではまた来週」

串本D「はい、OK！」

春香「よかった、当たってた……。安井さん、問題難しすぎません？」

安井「そんなことない、会津三方道路を作ったのは三島通庸って言うのは廃道界では有名なことだ」

春香「廃道界なんて知りませんよ！」

伊織「……。この牛乳の匂いってとれるのかしら？」

安井「それはUnknownだ」

明菜「きつと一週間もすればとれますよ」

伊織「一週間も待てないわよ！」

麗華「ファブリーズしとけ」

その後の打ち上げ。

やよい「うっう、お寿司、お寿司ー」

小花「回転寿司なんて久しぶりです！」

千早「あの二人、並ぶと双子みたいね」

明菜「今度はサトウキビでも栽培しようかしら」

響「沖繩に來ればいくらでもあるぞ？」

明菜「できればうちの農場で栽培したいわ」

響「東北ではサトウキビは厳しいさ……」

雪歩「私、お父さんがすごく反対してるんだよね……」

彩夏「私も同じですよ。それで家出して、765プロに入ろうと思ったんですけど場所が分からなくて困ってたなら三国社長が助けてくれて……。それ以来、392プロに」

雪歩「そうなんだ。でも、私も似たようなものかも……」

彩夏「今考えたらお母さんとお兄ちゃんには悪いことしたなあ。今度家に帰ってお父さんに謝ってこようかな」

雪歩「いいなあ……。うちのお父さんは言っても怒られそうだなあ……」

彩夏「素直に自分の気持ちを伝えてみればいいと思いますよ！きっと分かってもらえます」

雪歩「……そうだね！私も今度、お父さんに言ってみるよ」

こうして392プロが満を持して送り出すアイドルユニット「雪月花」はデビューした。

しかし三国はすでに次のユニットを用意していた。

雪月花よりも更に癖の強いユニット+αを。

第十二話「キャラが立ちすぎて困るパターン」

三国「やあ、高木さん。この前は電話でしたから、今回が久々の再会ですね」

高木「そうだな。4年間の間に芸能界は変わったかね？」

三国「いや、何も。相変わらずアイドルの態度に苛立ちを感じていきますよ」

高木「うちのアイドルにもかね？（笑）」

三国「まさか。（笑）しかし新しいプロデューサーはすごいですね。業界の雪月花への対応が180度変わってしまいましたよ」

高木「そうかい、それはよかった」

三国「それで今回の話なのですが。実はすでに次の子を用意しているんです」

高木「ほお、本当かね。どんな子だい？」

三国「・・・まあ、雪月花も結構独特な三人だけど、今回は四人。しかも、実際立った四人なんです」

高木「ふむ、話だけでは分からないな。写真とかはないのかね？」

三国「実は本人たちを呼んであるんです。おい、入ってきてくれ」

高木社長の前に三人が並んだ。

高木「ふむ、皆かわいいじゃないか。特に真ん中の君、名前は？」「私ですか？早乙女優希って言います」

高木「なかなかいい子じゃないか。ピンク色の髪も、声もすばらしいな。うちの春香君たちとセッションさせたいな。かわいらしい衣装とか着せて・・・」

優希「あ、あの・・・」

高木「ん？」

優希「実は私、男なんです・・・」

高木「なんだって!？」

三国「優希は、女の子として育てられたんだ。しかも去年、突然両親にカミングアウトされてね・・・」

高木「それはすまなかった・・・」

有希「大丈夫ですよ。私が男じゃなかったというのは中学校のころに思っていましたし、しょっちゅう間違えられますから」

高木「そ、そうか。左の子は？」

？「はい？」

高木「! き、君、何をしているんだ!？」

高木が見た左の少女は手首をペーパーナイフで切ろうとしていた。

三国「こらこら、駄目だって言ったじゃないか。それをしまつて、自己紹介しなさい」

？「はい。えーっと、新所原恵です。14歳です」

高木「そ、そうか。で、何でアイドルに？」

恵「アイドルになったら、メグを必要としてくれる人もいるかなと思つて」

高木「・・・なにやら複雑な事情がありそうだね」

三国「恵は虐待を受けた過去があつてね。自傷癖っていうのかな、やたら自分を痛めつけようとするんだ」

高木「ふーむ・・・。じゃあ、右の子は？」

？「ええ!？わ、私ですか!？私なんかの名前を聞くんですか!？」

高木「い、いや、初めて会つたし、ちゃんと名前は聞かないといけないだろう？」

？「そ、そうですよね! そうでした! え、えっと、宇田川桜っています!」

高木「桜ちゃんか。いい名前じゃないか」

桜「そ、そんなことはありません! 桜なんて名前ついて、日本を代表する木に失礼です・・・」

高木「いや、誰もそんなことは思っていないよ」

桜「いえ、みんなそう思ってます・・・。みんな私の前で言わない

だけで陰でそう言ってるんです……」

高木「えーと……」

三国「桜は被害妄想が強くてね……。何を言っても自分を卑下して考えてしまうんだ。本人はその性格を直したいようなんだが……」

高木「うーむ、これはすごい……。ところで、四人と言っていたがもう一人は？」

三国「買い物で遅れるそうです。もうそろそろ来るんじゃないかと思うんですが……」

ガチャ。

？「申し訳ございません、遅れてしまいましたわ」

三国「ああ、来たか。ほら、高木社長だ」

？「はじめまして。三国社長からお話は聞いていますわ。爺、あれを」

？「はい、お嬢様」

高木「……なにやらすごい子の子だね」

三国「高木さんとこのアイドルの伊織ちゃんや麗華ちゃんと並ぶ富豪らしいですよ。彼は執事の植木さん」

？「こちら、名刺ですわ」

高木「……『須崎友里加』か。よろしく、友里加君」

友里加「こちらこそ」

三国「この四人をあ番組に出してもらえないでしょうか？」

高木「出したい気持ちは山々だが……。キャラが強すぎて、うちや876のアイドルが目立たなさそうで……」

「その話、聞かせてもらった！」

安井「社長、大丈夫だ！俺たちに任せとけ！」

大平「俺たちが、皆を目立たせますよ！」

高木「安井君、大平君！？今日は休みと伝えたが・・・」

安井「近くを通りかかったんで。三国さん、任せてくれ。俺たちがそいつらも有名にしてやる」

三国「二人ともありがとう。よし、四人とも挨拶してくれ」

優希「安井さん！大平さん！」

恵「安井さん・・・大平さん・・・」

桜「や、安井さん、大平さん・・・」

友里加「安井プロデューサー、大平プロデューサー」

四人「よろしくお願いします！」

安井「よし、いい挨拶だ。じゃあ、ここに来てくれ」

友里加「あら、下原採石場って、父が経営している採石場ですわ。いつも使用許可を申請していたのは安井プロデューサーだったのですか？」

安井「いや、串本と西村だ。でもいい場所だ。夜景はきれいだし、程よく広いし」

優希「やっぱり友里加さんは違うなあ・・・」

大平「そんなことないって。俺たちがみんな人気にしてやるよ」

392のアイドルはどうして揃いも揃って独特なんだろうか。
まあ、明日が楽しみだ。

自分もそろそろ小鳥さんを食事に誘ってみるか。
(2010年9月、安井の日記より)

第十二話「キャラが立ちすぎて困るパターン」(後書き)

キャラ紹介

さおとめゆうき
早乙女優希

392の新ユニット、Eternal Flyersのリーダー。
16歳。ピンクの髪とアニメ声が特徴。

兄が三人いるが、両親は女の子がほしかった。だが今回も男だったので、女として育てることにした。ある意味虐待じゃない？

そして去年突如両親にカミングアウトされる。

その後、テレビで真と涼を見てこの二人のようになりたいと思い392に入る。

あえて392に入ったのは真や涼と競わないように。

趣味はお菓子作りとスポーツ。

あと、女子更衣室とか入れてうらやましいと思った人は正直に安井の前に出るように。

しんじよはらめぐみ
新所原恵

Eternal Flyersのメンバー。14歳。茶髪のロングヘアと手首の包帯が特徴。

両親は元暴走族。「たまたまできちゃった子だった」(両親談)せいで両親にネグレクトされて育つ。

両親が警察に逮捕され、その後施設に入る。

その10年間(生まれてから施設が出るまで)にすっかり性格が曲がってしまった。

人より血液の量が多いらしい。そのため手首を切っても死ぬ確率は

低いらしい。

ひきこもりからアイドルになった絵理と彩音のようにアイドルになろうと思いつき392に入る。

趣味はTVゲーム。あと自殺（本人談）。

最近はバタナイクで手首を切ろうとしたり、紐グミで首を吊ったりしている。自殺する気ないよね？ いや、それでいいんだけど。

うだがわさくら
宇田川桜

E t e r n a l F l y e r s のメンバー。14歳。黒のショートヘアーが特徴。

他の二人と違い両親に問題はなかったが、なぜか性格が曲がってしまった。

重度の被害妄想の持ち主。なんでも自分のせいにしてしまう。目の前で子供が転んでも、事故が起きても、地震が起きても自分のせい。

TVで愛を見て自分もこんなアイドルになりたい、そしてこの性格を直したいと思い392に入る。

趣味は生け花とマッサージ。意外と大和撫子？

すぎきゆりか
須崎友里加

18歳。金の巻き髪が特徴。巻きますか？巻きませんか？

須崎財閥の令嬢。

幼少のころから知っている伊織や麗華がアイドルをやっていることを知って自分もアイドルになろうと思い、392に入る。

執事の植木は友里加が生まれたときから仕えている。

意外と常識人。結構プライドが高い。

趣味はピアノ。さすがお嬢様、優雅でございます。
下原採石場は須崎砕石（株）のご協力により使用しております。

第十三話「それぞれの憧れ」

翌日、安井と大平は4人を連れていつもの採石場に集まっていた。

優希「ここでやるんですか？」

安井「そうだ。とりあえず、もうすぐうちの腑抜けたアイドルたちが来るから挨拶してやってくれ」

大平「腑抜けたとか言うなよ！みんな一生懸命頑張ってるんだよ！」

安井「4人ともいるか？」

優希「えーと・・・あれ？恵ちゃんがいません」

大平「どこいった？おーい、恵ー！」

恵「はい？」

桜「きゃー！恵ちゃん！？」

安井「自分の頭を岩石で殴るやつがいるかよ！串本、タオルと消毒液もってこい！」

串本「う、ラジャー！」

友里加「あれでアイドルになろうとよく思いましたわね・・・。爺、包帯あるかしら？」

植木「はい、ございます」

友里加「消毒が終わったら恵の頭に巻いてさしあげて」

植木「かしこまりました」

優希「ふう、びっくりしたなー！」

大平「なんかバターナイフで手首切ろうとしてるけど大丈夫か？」

安井「大丈夫だ、問題ない。バターナイフで自殺など出来るはずがねえ」

桜「私がちゃんと見ていれば・・・ごめんなさい、ごめんなさい！」
串本「いや、桜ちゃんのせいじゃないから。ていうか、これがいつもか？」

友里加「いつもこのような感じです。もう慣れました」

春香「おはようございまーす！」

安井「よう、芸能界注目のお笑い芸人、春香さん」

春香「芸人ちゃうわー!!」

優希「おはようございます、そしてはじめまして！392プロダクションの早乙女優希と言います！」

春香「よろしく、優希・・・くん？」

優希「はい、くんです。まあ、ちゃんでも大丈夫ですが」

恵「はじめまして、新所原恵です・・・」

春香「・・・なんで頭と手首に包帯が？」

桜「あ、それは私から・・・」

春香「うわあ、びっくりした！」

桜「あ、そうですよね、すいません！急に私みたいのが出てきたりして・・・」

春香「そんなこと思ってないよ！大丈夫！」

桜「あ、私は宇田川桜と言います・・・」

春香「よろしくね、桜ちゃん！それで、どうして包帯を？」

桜「えっと、恵ちゃんには自傷癖があって、よく手首を切っちゃうから、包帯を何十にも巻いて切れないようにしてあって・・・。頭の包帯はさっき怪我したんです」

春香「・・・なんか大変だね・・・」

友里加「3人とも紹介は終わったかしら？では私の番ね。爺、名刺を」

植木「かしこまりました」

春香「・・・この人は？」

優希「友里加さんの執事の植木さんです」

友里加「私、須崎友里加と申します。以後、お見知りおきを」

春香「は、はい。よろしくお願いします、友里加さん。他の3人も

よろしくね!」

優・恵・桜「よろしくお願いします!」

友里加「ところで、伊織と麗華はいつごろ到着するのかしら?」

春香「二人ももうすぐ来ると思いますよ」

優希「もうすぐ真さんと涼さんに会えるんだ!なんだかどきどきするなあ!」

恵「絵理さんと彩音さん……。何を話そうかなあ」

桜「も、もうすぐ愛さんが……。き、緊張しますー!」

春香「みんなそれぞれ会いたい人がいるんだ。どんなリアクションするのかな?」

安井「やはり芸能界期待のお笑い芸人、春香さんはリアクションが気になるか」

春香「だから芸人じゃないと(r y」

伊織「おはよう。また春香が一番?」

麗華「あー、眠い……」

友里加「おーっほっほっほっ!来たわね、二人とも!」

伊織「その声は……」

麗華「友里加!」

友里加「二人がアイドルになったことを聞いて、私もついにアイドルデビューですわ!すぐに追いつき追い越してみせますわよ!」

伊織「ふーん」

麗華「へー」

友里加「何ですの、その反応は?」

伊織「そう言うのってたいいかませ犬が言う台詞よね」

麗華「ていうか同じことを言った気がするな」

友里加「ふ、ふん!私の後姿を見て悔しがるがいいわ!」

植木「でも、友里加お嬢様はお二人との再会を非常に楽しみにしておられましたよ」

友里加「ちょっと、植木！」

伊織「なーんだ。素直じゃないわね」

麗華「ほら、胸に飛び込んでこい」

友里加「うるさい！」

真「おはよう！みんな早いね！」

涼「おはようございます」

優希「あっ！真さん、涼さん、はじめまして！392プロダクションの早乙女優希です！」

真「はじめまして！君も・・・よく間違えられる？」

優希「はい、よく女の子に間違えられます。でも本当は男の子なんです！」

涼「えっ、そうなんですか！？てっきり女の子だと思ってましたよ！」

優希「髪の毛がこんな色ですからね。それに両親には去年まで女の子として育てられましたから」

真「僕の父さんと逆だなあ。やっぱり親に対して反抗したりしたのかい？」

優希「いえ、それでも大切な親ですからそういう気持ちはなかったです。でも、今度は男として両親に認めてもらいたくて。そのときに、テレビで真さんと涼さんを見て、私もアイドルになったら両親に認めてもらえるかなって」

真「そっかあ。でも、僕も父さんに女の子として見てほしくてアイドルになったんだよな」

涼「僕は一回女の子としてデビューして、今は男の子として再デビューしたんですよ。だから、優希君の気持ちも少し分かります。3人で頑張らしましょう！」

真「よーし！ますますやる気が出てきたぞー！」

優希「私も、2人に頑張って追いついてみせます！」

彩音「おはようございまーす」

絵理「・・・おはようございます?」

安井「おはっす。新入り来てるからよろしく」

恵「えーと、おはようございます。新所原恵です」

絵理「はじめまして、恵ちゃん?」

彩音「はじめまして、サイネリアこと鈴木彩音デス!」

恵「お二人のことはよくご存知です。自分も引きこもりだったので」

絵理「・・・だからその包帯の訳とかも分かる?」

彩音「つらかったんだよね・・・」

恵「大丈夫。メグを必要としてくれる人もいるし、今は楽しいから」

彩音「そうデスヨネ! 私たちがいますから!」

絵理「恵ちゃん、一緒にがんばろ?」

恵「はい、頑張ります」

愛「おはよーございまーす!」

安井「おはっす。相変わらず無駄に元気だな。そうそう、新入りが来てるぞ」

桜「は、はじめまして! 宇田川桜と言います!」

愛「はじめまして! 日高愛です!」

桜「あ、あの、私、愛さんにあこがれてるんです」

愛「えっ!? 私にですか!?!」

桜「お母さんの力を借りずに芸能界で有名になって、どんな壁も自分で乗り越えて・・・。私も愛さんみたいに芸能界で活躍して、この性格を変えられたらいいなと思って・・・」

愛「・・・」

桜「あ、あの、愛さん・・・?」

愛「うわーん! ありがとうございますー!」

桜「あ、愛さん!?!」

愛「みんなママのことしか言ってくれなくて私は芸能界で必要なのか不安だったんです！桜さんの言葉で安心しました！一緒に頑張るましょー！」

桜「は、はい！頑張るましょー！」

安井「と言うわけで今日は○×クイズなんだが」

春香「またそれか！新メンバーの通過儀礼なんですか？」

優希「通過儀礼なら喜んでやらせていただきます！」

伊織「・・・少しは疑っていいのよ？」

安井「あと、今日は泥と牛乳を混ぜたものを使用してるから」

千早「・・・落ちたらひどいことになりませんか？」

安井「考え方を変えるんだ。全身泥パックを無料でできると思うんだ」

麗華「その考えは言われても思いつかねえよ」

大平「泥パックなら服着てたら意味ないしな」

―本番中―

安井「新メンバーの通過儀礼、○×クイズでございます」

春香「やっぱり通過儀礼になったんですね・・・」

明菜「今回も牛乳は小野寺牧場の提供でお送りします」

友里加「そしてこのロケを行っている採石場は須崎碎石の提供でお送りしますわ」

伊織「この番組は水瀬産業の提供でお送りします」

明・友「負けた・・・！」

麗華「お前ら、変なことで張り合うな」

安井「お疲れ。泥パックになったやつが多いな」

大平「お前、ひょっとして難しい問題をアイドルに回したか？俺の問題があんなに優しいわけがない」

安井「お前が飛び込んでも何もおいしくねえんだよ。アイドルが泥の中に飛び込むのを視聴者は望んでるんだ」

春香「安井さん、シャワーの数を増やしてもらえませんか？大行列になってますよ」

安井「番組の予算が少なくてそこまで手が回らない」

春香「嘘つけ！採石場を貸切にできる番組がなぜシャワーの数を増やせないんだよ！」

安井「分かった、分かった。もう一個増やしてやる」

春香「あと三つぐらい増やしてほしいんですが・・・」

安井「番組の予算が（ry」

春香「んな訳あるかああああ！」

優希「焼肉をおごってくれるなんて、いい人ですね！」

真「だろ？ああ見えて、安井さんは意外と優しいんだよ」

安井「はつくしょん！」

大平「うおい！何でこっち向いてくしゃみするんだよ！」

安井「お前だったら風邪ひかないだろうと思って」

大平「いろいろとどういうことだよ！」

恵「・・・」

絵理「金網を見つめてる？」

桜「・・・恵ちゃん、金網に手置いちゃ駄目だよ？」

彩音「やったことあるの？」

桜「二回ぐらい・・・」

恵「・・・（ジュー）」

愛「わー！恵さんが金網に手を！」

桜「あわわ、誰か氷持ってきて！」

新メンバーはあっという間に馴染んだし、視聴率だったらナイトスクープにも負けていない。

ただ、このまま仲のいいやつだけで続けるのはいかなものか。

そういえば、最近木星みたいな名前のやつが最近出てきたな。

事務所はうちを徹底的に倒そうとしてるやつだし、うまく利用してやるか……。

（2010年9月、安井の日記より）

アイマス小説第十四話「いろんな形での再会」

961プロダクション。

765プロのライバルとして自他共に認められ知られているプロダクションだ。

かつて、765から星井美希を引き抜き我那覇響、四条貴音とともに「Project Fairy」をデビューさせたが敗北。

その後美希が765に戻り、響、貴音も離脱。（その後765に加入）961は一時休眠状態となった。

しかし半年後新ユニット「Jupiter」をデビューさせ再び表舞台へ返り咲く。だが、またしても765に敗れJupiterの構成メンバーである天ヶ瀬冬馬、伊集院北斗、御手洗涼太が離脱。再び休眠状態となった。

黒井「ふん、いいさ。たとえばまたアイドルがいなくなったとしても俺は諦めない。あの高木を跪かせるまではな！」

そして黒井は再びアイドルを探し始めた。

それから数日後。

黒井「今回の奴らなら765も終わりだ。物理的にもな」
コンコン。

黒井「何だ？」

黒井がドアを開けるとそこにいたのはジュピターだった。

黒井「何だ？俺の顔が忘れられなくて戻ってきたのか？」

冬馬「そんなじゃねえよ。実は俺たち、またアイドルやってるの

さ」

北斗「あの舞台で女性たちを魅了させたのが忘れられなくてね。また三人でアイドルやろうって話になったのさ」

涼太「北斗の意見には賛同できないけど、今度こそ765を倒してやりたくてね！」

黒井「その心意気はいい。だがなぜ戻ってきた？」

冬馬「俺たちのプロデューサーを買って出てくれた人がどっかのプロダクションにいたほうが先行きは明るいつて言ったからさ」

黒井「お前らにも言ったはずだ、うちにはプロデューサーはいらないと。それにそんな理由でうちに置くわけにはいかないんだよ。もう次の奴らも待っているんだ」

冬馬「そんなこと言わずにまず会ってみてくれないか？それで気に入らなかつたら切ってくればいいし」

黒井「プロデューサーなどアイドルを墮落させるだけだ。アイドルは金と自身の名誉のためだけに働けばいいんだ」

涼太「そんなことないと思いますよ！それに彼はプロデューサーとしてではなくて、社員として働きたいんだそうです。会うだけでも会ってもらえませんか？」

黒井「・・・分かった。そこまでののなら会ってみよう」

涼太「よし！じゃあ早速呼んできますね！」

プロデューサー役の男「初めまして、黒井社長」

黒井「君がプロデューサー代わりってやつか？」

プロデューサー（ry）「はい、鏡宮達之と言います」

黒井「それで鏡宮君、うちのやり方は知っているのか？」

鏡宮「ええ、知っています。ですから自分もプロデューサーを続けるつもりはありません。プロデューサーではなく、一社員として働かせていただきたいのです。そして、ともに765や安井に一泡吹かせてやりましょう」

黒井「ふむ・・・。（この男、なかなかやってくれそうだ。それに

765に並々ならぬ対抗心を持っているようだな。というよりは安井にか）ところで安井の名前を知っているようだが、この業界に入って何年だ？」

鏡宮「もうすぐ6年です」

黒井「6年か。それにしては落ち着いている。まるで三国のようだ・・・」

黒井「よし、分かった。社員として、君を雇おう」

鏡宮「ありがとうございます、黒井社長」

黒井「冬馬、北斗、涼太。お前らも本当に765を倒そうという気持ちがあるなら戻ってくるがいい」

冬馬「へっ、そうじゃないとな」

北斗「すぐに追いつき追い越してみせるさ」

涼太「よし、明日からがんばるぞ！」

鏡宮「顔洗って待ってろ、安井、大平。お前らに目に物見せてやるからな」

黒井「高木、お前の事務所も終わりだ。『Jupiter』と『Acid Snow』でお前らを平伏させてやる・・・」

場所は変わって765プロダクション。

すでに961の情報はアイドルたちにも伝わっていた。

伊織「へえ、よく戻れたわね。貴音と響は戻りたい？」

響「いや、765のほうが明るいし楽しいし大好きだぞ！」

貴音「私どもにはもう961に戻ろうという気はありません」

安井「だろうな。悪い評判しか聞こえてこねえし」

春香「あ、そういえば安井さん聞きましたか？黒井社長の右腕みたいな人がいるって」

安井「あー、ちらっと聞いたな。途中入社ながら、あつという間に評価を上げて黒井からも信頼されてるらしいな」

律子「ちよっと調べてみたら、結構情報がありました。安井さんたちが入社した三ヵ月後に入社しています。名前は……『鏡宮達之』（きょうみやたつゆき）、って言うようですね」

安井「鏡宮達之？」

安井「ああ、インテリの鏡さんか」

春香「え？インテリの鏡さんって……。安井さん、知ってるんですか？」

大平「ああ、俺たちの一年先輩。喧嘩も強くて、頭も良くて俺たちの憧れだった人だ。まさかこうして業界内で対決できる時がくるとはな」

安井「鏡さんのことだ、黒井に媚びるんじゃないでアピールしてたんだろうな」

そのとき、新聞を見ていた（理解しているかどうかは置いて）真が言った。

真「あ、安井さん。なんか961が記者会見やったらいいですよ」

安井「へえ、見せてみる。『961プロダクションはかつて所属したアイドルユニット『Jupiter』の再加入と新ユニット『Acid Snow』の結成を発表した』、か」

亜美「と言うことはまたライバル出現だ！」

真美「しかも今回は2組だ！」

安井「まあ、いきなり問題だらけみたいだな。『しかし、Acid Snowの三人の内の一人が来ず、ユニットによるコメントはジュピターのみとなった』そうだ」

高木「いきなりそんな状態か。今回は黒井も厳しそうだな」

大平「おい、安井。この黒井社長の隣にいるの、鏡さんじゃないか？」

安井「あ、本当だな。鏡さんもすっかり業界人だな」

春香「へえ、この人がですか。なんかカッコいいですね」

安井「おっと、春香に961移籍フラグが・・・」

春香「立ってませんから！！勝手なフラグ立てないでください！」

愛「春香さん、行っちゃうんですか！？」

絵理「人間には進化が必要？」

彩音「春香さんは今、進化への第一歩を踏み出しているのデス。私たちにはとめる理由はありません、暖かく見送ってあげましょう！」

愛「そ、そうですね・・・」

春香「待てーいい！！」

ドンドン！

高木「ん？来客か？」

安井「橘かもしれないんで俺が出ますよ」

ガチャ。

？「ここが765か……。会見サボってまで来るところじゃなかったな」

麗華「おい、それが最初の言葉か？そもそもお前は誰だ？」

？「私は高橋美幸。」

「A c i d S n o wのメンバーだ」

春香「ええー！！」

真「じゃあ、もしかして会見サボったのは……」

美幸「私だ」

安井「お前だったのか」

亜美「暇をもてあました」

真美「アイドルの」

亜美真美「遊び」

律子「亜美、真美、ちょっと来て」（満面の笑みで）

亜美真美「ごめんなさーい！！」

美幸「今日は宣戦布告しに来たのさ。私たちが765をぶっ潰す」

安井「フラグが立ったな」

伊織「かませ犬フラグね」

麗華「ジュピターも似たようなもんだったな」

美幸「そのフラグを立ったままにしておくか、へし折るかはこっちが決めること。今に見てな」

安井「その心意気やよし。期待させてもらおうか」

美幸「上等だ。黒井が言ってたとおりだな。それと……」

「美幸、こんなところにいたのか」

美幸「！ 鏡宮さん・・・」

鏡宮「社長が呼んでる、早く戻るぞ。ん？持和に一じゃないか」

安井「お久しぶりです、鏡さん」

大平「お久しぶりです。まさか鏡さんが芸能界に来るなんて・・・」

鏡宮「もともと、6年前にとあるローカル局に入った。でも、俺には番組より人間をプロデュースしたいという気持ちがあった。ずっとフリーでプロデューサーまがいのことをしてたんだ」

安井「へー、そうなんすか。すごいっすねー」

大平「と言うことは、これからはライバルっすね！」

鏡宮「そうだな。まあ、プライベートと仕事は分けるつもりだがな」
？「ま、待ってくれ鏡宮さん！」

？「何で急に走り出すんだよ！」

？「すごく疲れました」

安井「誰ですか？」

鏡宮「Acid Snowのメンバーだよ。ほら、お前らも挨拶しておけ」

「俺は尼子修介だ！お前らを倒して俺がアイドルのトップに立つ！」
響「尼子？お前、田中の修介兄ちゃんじゃないか。久しぶりだなー、元気か？」

修介「おいバカやめろ！俺は田中じゃなくて尼子だ！後修介兄ちゃんもやめろ！」

貴音「響、この方をご存知なのですか？」

響「ああ、近くに住んでた田中さんちの修介兄ちゃんだ」

安井「田中って、めっちゃ地味だなw」

修介「ああ、そうだよ！この苗字じゃだめだと思って屁子って名乗ってるんだよ！文句あるのか！？」

安井「いえ、どうぞご自由にwww」

修介「この野郎！」

「はじめまして、橋川雪乃です！この前から961にお世話になってます！目標は皆に好かれるアイドルです！よろしく願いします！」

大平「えらく慣れてるな。前からアイドルやってたのか？」

雪乃「い、いえ、人見知りがありません・・・」

麗華「・・・ちょっと待て、どっかで見覚えがあるぞ」

雪乃「え！？や、やだなあ、気のせいですよ」

りん「・・・あーっ！！」

大平「な、なんだ、どうした！？」

りん「麗華！こいつあれだよ、旧『雪月花』の『雪』だよ！！」

ともみ「・・・なるほど、どこかで見たことあると思ったら。あの時はショートでしたもんね、『雪』さん？」

雪乃「え、えーっとお・・・」

麗華「ああ、そうか。あの『雪』か。あの時はよくもやってくれたな」

そういつて麗華は握りこぶしを作った。

雪乃「ま、待ってください！あれは事務所の命令だったんです、私たちは悪くないんです！」

麗華「問答無用！」

雪乃「ひい!？」

ガシッ!

りん「!？」

雪乃「・・・あれ？」

ともみ「大平さん・・・？」

麗華「・・・離してもらえるか。この一発は、俺とりんとともみの気持ちがかもった一発なんだ」

大平「確かに殴ったらその恨みは晴れるかもしれない。でも、新しい恨みが生まれるんじゃないのか？それに、殴って過去がどうになるのか？今その場では気持ちは晴れるけど、また気持ちは曇らないか？そこまで考えて、殴りたいなら殴れよ」

麗華「・・・」

麗華はゆっくりと雪乃に近づいていった。
そして――

麗華「いつまでへたり込んでるんだ？さっさと立てよ」

麗華は雪乃の手をつかんで立たせた。

雪乃「・・・許してもらえないのは重々承知の上です。でも、私はもう一度アイドルになって、麗華さんたちと戦いたかった。あのときのことを清算してはもらえないでしょうが、アイドルとして姑息な手を使わずに舞台に立ちたかった。だから地下アイドルを辞めてこっちに帰ってきたんです」

亜美「地下アイドル？」

鏡宮「普通のアイドルがやらないような、過激なこともするアイドルのことさ。雪乃は地下アイドルとしてかなりの人気を誇っていた。黒井さんは雪乃が雪月花の『雪』だったことを知って事務所に招いたのさ。普通のアイドルには戻りたくないであろうことを承知でな」

雪乃「弁解になってしまいますが聞いてください。私たちは素人同然だったため、芸能界のことは右も左も分かりませんでした。そのとき、プロダクションの社長が言ったのが『悪人になれ』でした。悪人は人から嫌われるが、同時に強い印象を残すからと。私たちは社長の言うままに悪人を演じました」

りん「そうだったんだ・・・。全部社長命令だったんだ・・・」

雪乃「そんな時、麗華さんたちが幸福エンジェルとしてデビューしました。社長は、麗華さんたちがあつという間に私たちを抜いていくと考えたのです。麗華さんたちは才能があつた。だから、早めにつぶしておかなくてはと思ったのでしよう。そして、社長は私たちに幸福エンジェルの出番を奪うよう命じたのです。社長命令ゆえに逆らうことはできませんでした・・・」

ともみ「あれも社長命令・・・。なんて極悪非道な社長なのかしら」雪乃「でも、その後麗華さんに芸能界を追放されることになって気づいたんです。アイドルは社長に言われるがままに動くのではなく、自分たちで動かなきゃいけないって・・・。私は麗華さんたちへの

行いを恥じ、社長がとある方法で私たちを芸能界に戻そうとしていたのを拒み、芸能界をやめたんです」

麗華「それで、地下アイドルに……？」

雪乃「地下アイドルはお客様の期待に精一杯こたえなくてはなりません。雪月花のときにはやらなかった、お客様への本当の感謝が必要だったんです」

麗華「……」

雪乃「いまさらあのときを振り返ってもどうにもなりません。でも麗華さんたちの心を踏みにじり、ずたずたにした責任をまた取ることができるかもしれません。……麗華さんたちに追いつけるかは分かりませんが、また一から一生懸命頑張らせて頂きます」

鏡宮「じゃあ安井、大平、帰るわ。挨拶も紹介もできたしな」

安井「ああ」

大平「お氣をつけて」

美幸「じゃあな」

修介「今に見てろよ！」

雪乃「……」

麗華「……雪乃」

雪乃「……はい？」

麗華「今度は舞台の上で正々堂々勝負だ。逃げたりするんじゃないわねえ」

ぞ」

雪乃「・・・はい！」

亜美「雪乃ねーちゃんと麗華っちは仲直りできたの？」

安井「さあな。だが、麗華の胸の中にあった『何か』がなくなったのは確かだ」

りん「麗華・・・」

ともみ「リーダー・・・」

麗華「何だ？ お前らも頑張らないとあいつらに抜かれるぞ？」

りん「・・・！ そうだよね！ よーし、頑張るぞー！」

ともみ「あのときの私たちとは違いますもんね。今度は直接対決です」

麗華「ああ、今度は横槍なしだ。真っ向からぶつかって雪乃を倒す！」

りん「でも麗華、それって最初に死ぬやつの考え方だね」

ともみ「北斗の拳だったら『ヒヤッハー！！』って言ってすぐやられるタイプですよね」

麗華「うるせえ！」

安井「いいねえ、なんか面白くなってきたじゃねえか」

安井「それじゃ早速、直接対決といこうじゃないか」

アイマス小説第十四話「いろんな形で再会」（後書き）

新キャラ紹介

きょうみやたつゆき
鏡宮達之

961の新社員ながら、すでに黒井の右腕として活躍する敏腕社員。安井と大平の一年先輩であだ名は「インテリの鏡さん」。

高校卒業後、サラリーマンになったが翌年串本と同じような理由で転身。番組の担当をしていたがアイドルの育成がしたいと思い再度ジョブチェンジ。フリーのプロデューサーとして活動する。

黒井との約束通りプロデューサー的な仕事はしていないが、アイドルたちの相談に乗ったりアドバイスをしたりとほぼプロデューサーっぽいことをしている。黒井も黙認している様子。

昔は荒かったが高校時代に丸くなった。まず利益を考えるタイプ。後鍛えればいろいろどうにかなると思っっているらしい。

961に入った理由はアイドルと身近で接するためと、安井・大平と喧嘩以外で対決するため。

A c i d S n o w

あまこしゆうすけ
尼子修介

A c i d S n o w のリーダー。熱い。うるさい。面倒くさい。

髪型は黒の無造作ヘアー。妹がいる。

たなかしゆうすけ
本名は田中修介。地味。

戦国時代の尼子家に仕えていた山中鹿之助のような人物になりたい、という理由から山中という苗字にしようとしたが結局地味なままだったので尼子という芸名にしたらしい。

ただ、具体的に何をやったかはほとんど知らないらしい。何だ、アホの子か。

趣味はアニメ・ゲームグッズ集めとゲーセン巡り。冬馬と同じ香りが。

ただ、冬馬がフィギュア集め（限定かどうかは不明だが）だけなのに対し、修介はかなり幅が広い。抱き枕を毎日変えているという噂が。

冬馬と同じで黒井にあっさりと騙されたが、美幸にそれを知らされた。（物理的に）

黒井の考えるアイドル像を自分が変える！と燃えている。ガスなどを近づけないでください。

響の家の近くに住んでいて、以前響と遊んであげていたため響からは「修介兄ちゃん」と慕われている。

そして、あっという間に765の年少勢に伝染。やよいや亜美真美からも「修介兄ちゃん」と呼ばれるように。

お分かりのとおりいじられキャラ。愚直なほど真っ直ぐ。

たかはしみゆき
高橋美幸

Acid Snowの左側。元ヤン。

髪型は茶髪のショートヘアーでいつもバンダナを巻いている。兄弟はいない。

常にタバコをくわえているため健康状態が心配される・・・と思いきや実は電子タバコ。元ヤン時代から健康第一。

神出鬼没で今日は事務所にいないと思いきやいつの間にかいたりする。

黒井のアイドル論には否定的。自身がアイドルになって、もっと女らしくなればと思いきや961に入った。

だが、真と涼と優希を見て早くも揺らぎ始めている。「このままでもいいかも・・・」

喧嘩上等。でもまずは話し合わないか？「意外と賢いヤンキー」。

（鏡宮談）

さばさばしていて男にも女にも好かれる性格。亜美真美からは「みーさん」と呼ばれている。

はしかわゆきの
橋川雪乃

Acid Snowの右側。元地下アイドル。

髪型は緑のロングヘア。雪だるまの髪飾りがついている。姉と妹がいる。

その正体は旧雪月花の雪。麗華によって追放された後、自分たちの行いを反省し勝手に解散を発表、プロダクションを離れた。地下アイドルになったのは麗華達の苦勞を表舞台に出ずに味わうため。そしていつの間にか大人気に。

いずれまた表舞台に戻り麗華達と正々堂々戦いたいと思っていたため黒井社長からの誘いはまさに渡りに船だった。

本当の性格はふわふわしていて天然。塩と砂糖を間違えるのは当たり前、電車のホームを間違え乗る電車を間違える、バイトのシフトを交代してもらったのに間違えて行く、財布を忘れて買い物へ行くなど武勇伝？は尽きない。

絵理や彩音からは「ゆっきー」と呼ばれている。ネット配信もよくやっていたため絵理や彩音は既知。

亜美真美からも「ゆっきー」と呼ばれるように。（今回はまだ「雪乃ねーちゃん」と呼ばれている）

雪だるまの髪飾りは雪月花時代のものでこれでりんやともみにばれたのだが本人は気づいていない。

インフェルノプロダクション

旧雪月花が所属していたプロダクション。モットーは「悪人になれ」

。

アイドルは雪月花だけだったが、あらゆる手段を使って力を広げた。が、麗華によって雪月花が追放されプロダクションも急激に衰退。雪月花解散後はアイドルを続けたがった『月』のみが所属したが衰退は止まらず、あえなく解散した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4365p/>

765+αの挑戦

2011年11月12日05時30分発行